

---

# 冷たい炎と月鏡

四方紅霞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冷たい炎と月鏡

### 【Nコード】

N6782C

### 【作者名】

四方紅霞

### 【あらすじ】

ふと気づくと幽体となって空に浮いていた青年は、不思議な出来事へと巻き込まれていく…。

## 第一話   （前書き）

この作品はフィクションです。

## 第一話

フワフワと浮いていた。

それ以外に形容する言葉は無く。

空を見上げると星が広がり、眼下がんかに見えるのは家々の明かり。

真上から見ると、町ってこんな風に見えるのか…何て考えていた。こんなに高いところにいるのに、星にはやっぱり手が届かない。

「そりゃ、そうだ」

声にだして俺は少し笑った。

ロマンチックな事を考えてどうするってんだ。

季節は冬のはずなのに実際、寒さを感じない。息を吐いても白くならなかった。

「夢か…はたまた、幽体離脱ゆつたいりだつか？」

「ほぼ正解」

耳元で声がして、俺は反射的に振り向いた。

「やあ」

そこには黒いながらも光っている猫がいた。

「現在、お前さんは己おのれの意志に反し魂たましいとなって体外離脱中。元に戻りたかったら、おいらに付いて来て」

「付いて行きたいのは山々だけど、フワフワして思うように動かないんだけどね」

「ええ？ 仕方ないなあ…」

黒猫は人間くさくため息をつく、俺の服の襟えりをくわえて引っ張った。

「魂でも服着てんだ…」

俺のつぶやきに、黒猫は一旦引っ張るのを止めて啞ええていた襟を離す。

「変なところに気付く奴だなあ。魂っていつでも色々種類があんのさ。体外離脱する魂ってのは大抵服着てるよ。もちろん、お前さんが裸

を想像すれば裸になるかも…、でも今はやめておくれよ？ 髪の毛引つ張られたくなかったら」

「それは…嫌だな…」

想像しそうになって、慌ててバタバタと体を動かした。危ない危ない。

黒猫は再び襟を咬えて、俺の身体を下へ下へと引つ張っていった。

「レスキュー隊に助けられた人の気分」

「何言ってるんだ。ほら、着いたよ」

俺の身体はまだフワフワと浮いていたが、辺りを見回すとそこは公園だった。

すべり台なんかはあるけど、ジャングルジムがない。

「ご苦労様、助かったよ」

もう一人の声がして、浮いたままの俺は顔を動かしてその声の主を見た。

「空を飛ぶのは好きじゃないのに、ごめんね」

「青空あおぞらが飛べないんじゃないよ」

青空？

俺が首を傾げると、黒猫に話し掛けていた黒い服を着た少年が慌てたように、俺の胸元に銀色のシールを貼り付ける。その途端に俺は地面に落ちた。

## 第二話

「わっ」

背中を打って痛みあまり地面を転げ回る俺を、助ける様子もなく少年と猫はただ見ている。

「痛いじゃないか！」

「何で？」

「何でっ…て、急に落ちたから背中打ったんだぞ」

黒猫と少年は顔を見合わせた。

「幽体ゆうたいなのにな？」

「はっ？」

俺は起き上がって背中を触ってみた。驚いたことに痛みが無くなっている。

「えっ…あれ？」

「凄い想像力だね…」

「へええ、初めてだなあ、想像で痛がる奴」

何だか恥ずかしくなつて、俺は立ち上がった。砂や埃は付いていなかったけど、何となく服のほこりを払うふりをして恥ずかしさを誤魔化す。

「えっと、確認したいんですけど。あなたは三刀屋みとや 鋼樹くわじゅさんですよね？」

黒い服の少年は微笑んでそう言った。

何とまあ、無防備な笑顔。

「ああ、そうだけど」

ふと黒猫を見下ろすと、もう光ってはいなかった。俺を見上げてにやーと鳴く。

「時間ありませんので、手短に話させていただきます。まず、僕は青空あおぞらと申します。こっちは大治郎だいじろうです。以後よろしく願います」

「は、はあ」

「実は、貴方が戻るべき魂の器うしわが、故意に隠されてしまいました」  
「はああ？」

黒い服の少年青空は、手に持った最小のノートパソコンをパタンと閉じた。俺が欲しいと思ってたのと同じ型。

「こちらとしても色々手を尽くして捜したのですが、見つかりませんでした」

「なあ？ 青空。こちらさんはさっぱり理解してないようだけど」  
黒猫の大治郎が青空の足を軽く引っかけてそう言う。

「えっと…すいません。つまりその、貴方あなたの身体からだが消えてしまったんです」

思わず煙に包まれて消える自分の体を想像してしまった。

「消えてしまった…って。別の場所に移動したんじゃないやなくて？」

「移動しただけなら、すぐに見つけられます。幽体というのは自分の体がどこにあるのか、無意識に感知するはずなんです。でも、貴方たいがいりだつの場合は無理やり体外離脱たいがいりだつさせられた上に、二週間もそのままです。鬼籍きせきにも載っていないので死んでいることは無いのですが、しかしこのままだと戻れなくなり…」

「そのうち鬼籍に入っちまうんだねえ」

大治郎がそう言っ、目を細めた。

「きせき…って何？」

「新聞のおくやみ欄らんみたいなもん」

「こら、大治郎！ えっと…その死者の名簿です」

「このままだと死ぬってこと…？」

「はい…」

何とも実感の湧かない死亡告知。

「故意に隠された…ってどういうこと？」

「幽体と器は気で繋がっています。それを途中で遮断じゃだんされてしまったため、見つからないのです。ただ、遮断されているとはいえ、断ち切られてしまったわけではないので、生きています。たぶん、そ

の身体を生かしておく必要があるからだと思われるのですが」

言いにくいのですが…と前置きして、青空はノートパソコンをも  
う一度開く。

「今までの報告例からしますと見つかった器はゼロです」

「気が見つからないことには、おいら達もお手上げなんだよ」

「このまま、黙って死ねっていいのか!？」

ゼロ。それは無。

俺は踵きびすを返して公園を出ようとした。

「待ってください！ 何処へ行くんですか」

「身体捜しに行くに決まってんだろう」

「そのシールは一日しか持たない代物だから、また身体が浮いちゃ  
って、それどころじゃ無くなるってば」

むっとして大治郎を睨にらむと、黒猫はニイツと口の端を上げて笑っ

た。

「慌あわてなさんなつて。これから一つ提案ていあんをしたいと思ってるんだよ  
ねえ」



### 第三話

「提案？」

「あのう…僕らじゃ見つけれないんですけど…もしかしたら貴方<sup>あなた</sup>自身なら見つけれられるかもしれないんです」

「本当か！？」

「その…あの…でも、幽体<sup>ゆうたい</sup>のままじゃ無理なので…」

「ひとつ、おいら達が器<sup>うつわ</sup>を用意しようじゃないかって話」

青空はパソコンに何か打つと、俺に向かって画面を見せた。

「船迫<sup>ふなさこ</sup> 要<sup>かなめ</sup>という高校一年生の少年です」

「こいつの魂は？」

「いいとこ気付いたねえ…要っちの魂は封印されてるんだなあ…これが」

「封印？」

「封印じゃないよ…大治郎。えっと、特別にアルバイトを…」

「は？」

「封印って言っても嘘じゃないだろうに。要っちは青空の同僚を助けたお礼として、一年間だけ一緒にそいつと行動を共にすることを願って、魂のままだと戻れなくなっちゃうからおいらのような動物に封印されてるのさ」

「なので、この身体を使う期間はあと十一月二週間と二日です」  
頭の中にクエスチョンマークが沢山<sup>たくさん</sup>並ぶ。

「大治郎も、封印されてるわけ？」

「ああっ、呼び捨て…まあいいけど。一応、お前さんより年上なんだよ？」

大きくため息をついた後、上目遣い<sup>うめづかい</sup>で俺を見た。

「おいらの場合はちよっと特別な理由で自分から封印されたんだ」

「その後の質問は、時間が無いので今度にしてください。病院に案内します」

「……近いのか？」

俺の言葉に青空は大治郎を見る。

「二人は無理かな？」

「ううーん…シール外せば何とかなるかな」

「よし、行こう」

うなづいて青空が二本の指を大治郎の額に当てた途端に、黒い体が光り始めた。シールが外されて、俺の身体が浮きあがる。

「青空！　しっかり捕まっとけよー」

青空は左手で大治郎の尻尾しっぽを捕まえると、右手で俺の襟首えりくびを捕まえる。

「何でもいつも襟首なんだよっ」

「それーっ」

一気に引つ張られて首が絞まる。

「く、苦しい…って」

「もう着きました」

再びシールが貼られて病院の床に下りた。

「本当に貴方は想像豊かな方ですね」

「一瞬で、着いてんだけどねえ」

顔熱い。青空の笑顔が逆に嫌味に見えるのは俺の心が荒すさんでいるせいか？

俺は右手で顔を扇あおぎながら俯うつむいてしまった。

「さあ、急ぎましょう。朝までに入ってしまったくないと」

閉まったままのドアをすり抜けて（本当に通り抜けた！）病室に入り、俺が入ることになる身体を見つけた。

## 第四話

「ここ、個室じゃないか…うわぁ金持ち…」

「変な感動しないでください。それより、彼の身体を借りるための注意事項です。まず、彼は高校一年生ですから未成年だつてこと忘れないで下さいね。タバコやお酒はだめですよ」

「えーっ…だめ？」

「いつまで我慢がまんできるのか。」

「だめです。それから、高校に通ってもらつことになるかもしれない  
せん」

「ちよつと、待てよ」

「彼は高校生です」

「分かつてるけど、俺の身体からだを捜さなきゃならないだろう？」

「もちろんです。でも、高校生の彼が昼間からうろつろつしていたら  
どうなります？ これも条件のうちです」

「遠くにあつたら見つからないじゃないか！」

青空はパソコンの画面を俺に見せる。

「いいですか、ここが唯一感知できた気の最後の場所です。ここま  
でなら気を辿たどることが出来ます。この気の範囲を考えると非常に近  
くにあると思われるんです」

「ここ、学校じゃないか」

「はい、丁度彼が通っている学園の中庭です」

「分かったよ…でも学校以外は好きにさせてもらつたらな」

「彼の自宅にはなるべく帰ってください」

そう言つて青空はベッドの脇にあるテーブルに折りたたんだ紙を  
置く。

「これは彼の行動範囲の地図です。忘れずに持つて行ってください  
ね」

「青空、太陽が昇るよ」

「うん、わかつてる」

青空は器の身体を横向きに動かした。点滴をしてるためうつ伏せにはできないからしかった。

「それじゃあ、彼の背中に手を当ててください…シール外しますよ！」

「えっ」

待つてくれという間もなくシールが外された途端に、ガクンと身体が揺れる。

「気持ち悪い…」

耳慣れない声が聞こえてきて、俺は瞼を開けた。

どうやら上手くいったらしい。

吐きそうになって身体を仰向けに戻そうとした時、看護師と目が合った。

「せつ先生！」

バタバタと足音を立てて看護師（女）は走っていった。

病院って走っちゃダメなんじゃなかったっけ？ あれ学校か…？

カーテンが開いていたため、窓から太陽の光りが見えた。あいにく建物の影で太陽自体は見えなかったけど。

点滴が邪魔で、思うように動けない。それに何だか体中の力が出なかった。フワフワしてる。そのうえグルグルで時々グワングワんだ。

「同じじゃないか…」

飛んでる方が良かったような…なんて考えていると、数人の足音が近づいてきた。

「君の目の錯覚じゃないだろうね」

「違います、確かに目を開けていました！」

数人が走り寄ってきて、俺の顔を覗き込む。

「ああっ、気付いたんだね！」

大きな声を上げるので、頭がガンガン痛くなる。吐き気も強くなってきた。

「言い忘れてたけど、拒否反応で頭痛と吐き気がするから」

声の方に視線をやると、青空が大治郎の尻尾しっぽにつかまったまま空中に浮かんで窓の外にいた。

「あ……」

おぞら……と言おうとすると、口の前に人差し指を持ってくる。

「あなた以外には見えていないし聞こえていないですよ……明日になれば治ると思います。それじゃあ」

そのまま上に上がって行くのかと思ったら、風船が萎しぼんで行くように下へ下へとゆっくり降りていった。

## 第五話

「ちょっと、失礼」

そう言つて医者（白衣を着ているから…たぶん）が俺の…というか船迫 要の腕をとつて脈を調べる。

さっきの看護師が血圧計を持ってきて計り、体温計を腕に挟むように言われた。

「具合はどうだい？」

「頭痛と吐き気が…」

「ううーん、血圧も正常、体温も…うん大丈夫だね。君、あれを持ってきてくれないか」

「はい」

あれ、と言われて看護師が持ってきたのはそんなに深くない銀色の容器だった。

「どうしても気持ち悪くなったら、これに吐きなさい。君、船迫さんには連絡をいれたんだろうね？」

「はい、すぐにいらつしやるそうです」

医者は大きく頷いて、腕時計を見る。

「色々検査をしなくちゃならないから、また後で会おう」

そう言つて、頭痛と吐き気には何の対処もないまま立ち去った。

「ちよつと…」

引きとめようとして吐き気が襲い、仕方なく俺はベッドに横になった。

横向きになろうが仰向けになろうが気持ち悪さは治らず、何度も身体からだの向きを変える。うつ伏せになってみようか…なんて考え始めた頃、病室のドアがいきなり開いた。

看護師がベッドの周りのカーテンを開いて行つたので、入ってきた人と目がばつちりと合ってしまった。

第一印象、ケバイ。もとい、派手な格好。

いや、本当に病院にくる格好かよって感じ。

印象が悪かったので、俺の言葉もぞんざいになる。格好だけで判断するのは好きじゃないけど、何しろ吐き気と頭痛で機嫌が悪い。タイミングが悪かったと思って欲しい。などと思いつつ、俺は睨みながら言ってしまった。

「あんた誰？ ノックもなしで入ってこないでくれる？」

途端にその人物…派手な女性は一瞬、驚いた顔をした後、ベッドの横にあるソファに泣き崩れてしまった。

「っつーか、誰？」

いらいらしていると（俺から質問するつもりは毛頭ない）看護師が慌てた様に、その女に駆け寄って身体を支えていた。

「看護師さん、その人誰？」

看護師も驚いたように俺を見て、さらに女を見る。

「お母様…ですよね？」

看護師が確認するように言った。

「お・か・あ・さ・ま？」

がばつと身体を起こして女…もとい、お母様は看護師に詰め寄った。

「どういふことですか！？」

「い、いえ。私にも何が何だか…」

どうやらこの女が船迫 要の母親らしい。青空も家族の写真ぐらい見せておけて。初っ端から失敗しちゃったじゃないか…。

まさか要もお母様なんて呼んでいたわけじゃないだろうなあ。

ママか？ いや、俺のガラじゃない。

母さん？ お母さん？

俺が無言で考えていると、少し落ち着いた母親が俺の顔を覗き込んだ。

「要…お母さんのこと忘れちゃったの？」

「えっと、忘れてないよお母さん」

その途端にまた、わっと泣き出してしまった。

何なんだよ…まったく。

こっちは頭痛と吐き気で大変なのに。

俺はため息をついて布団ふとんを被かぶった。

「要！」

「いい加減にしてくれよ！ 頭痛いんだよ！」

「お母様、一旦こちらへ」

看護師が病室から要の母親を連れ出してくれたおかげで、頭の痛みが少しだけ和やわらいだ。

布団を被ったせいで、眩暈めまいまで起こしてしまい俺は目を閉じる。

こんなところでのんびりしている暇ひまはないのに、満足に身体も動かせないときた。

「要くん大丈夫？」

看護師が戻ってきて、小さな声でそう聞いていた。

「頭痛と吐き気がひどいです」

「そう……ねえ、本当にお母様のことわからないの？」

俺は布団をゆっくり元に戻して顔を出した。

「さっき、何で泣いたかわかりますか？」

「あのね。要くんはいつも、ママって呼んでいたみたいよ」

お母さんのこと忘れちゃったの？ っていうから、てっきりお母さんって呼んでいると思っちゃったんだけどなあ。

深くため息をついて、俺は点滴てんてきを見上げた。



## 第六話

「点滴、いつ終わります?」

「検査が終わる頃には外せると思うわ。朝食は出ないけど、お昼から重湯おもゆが出るとおもうから」

「重湯?」

「それかヨーグルトかな? ちょっとわからないけど急に胃に入れたりしちゃダメなのよ。少しずつ元の食事に戻るから我慢がまんしてね」  
看護師はニツコリと笑って病室を出て行った。

腹が減っているわけではないけど、ダメだと言われると逆らいたくなる性分しょうぶん。

「でも今、固形物食べたら絶対吐くよな…」

というわけで断念して、重湯で我慢することにした。

何とか喉を通して胃に納まる。

さっきより吐き気は治まってきたから、激しく動かない限りは大丈夫だろうと、素人判断しろうとはんだん。

壁にかかっていた時計を見ると、もうすぐ八時になるところだった。

どうせ検査はまだだろうから、眠っておこう。

そう思って俺が目を閉じた途端に、ノックの音がして、医者いしゃと船ふね迫きこのお母様が入ってきた。

「要くん!」

仕方なく目を開けると、医者いしゃがものすごく慌あわてた様子で椅子に腰掛けた。

さすがに、さっき会った時より顔色悪い感じかも。

「お父さんの名前は分かるかい?」

俺は無言で返す。

だって青空のやつ何も言わなかったじゃないか。

船迫 要っていう名前以外、ほとんど聞いてないぞ。

「生年月日は？」

高校一年生だったっけ。

「住所は？」

んなもん知るか。

そういえば、青空が置いていった地図があるけど、今ここで開くわけにはいかないしなあ。

「記憶喪失ですか！？」

ママって呼ばなくてもいいかな…。ガラじゃないんだって。

誰が何と言おうと、お袋ふくろだよなあ。せめてお母さんか…。

兎とに角かく、ここではお袋ということにする。が、そう喚いた。

## 第七話

「一時的なものだと思われるのですが……」

俺が要の身体に入っている限りは、ずっとです。

何だか可笑しくなってきた、顔がにやけてくる。

俺は身体を横にして肩を震わせた。笑っているのを誤魔化すためだったけど、医者とお袋はそう思わなかったらしく、憐れんだ様子で医者が俺の肩を優しく叩いた。

「大丈夫。すぐ思い出せるさ。君が思いつめる必要はないんだよ」  
涙出そう。

お袋の心中を察すると笑い事じゃないんだろうけど、事情を知っている俺にしてみれば滑稽な話だ。

あんたの可愛い息子の中身は、まったくの別人ですって言ったら、どんな顔するんだろう。

まあ、まず信じないよな。

不謹慎な奴だろうけど、そもそも本物は自分で出て行っただから、文句は本人に言っただけ。

何とか笑いを押さえ、俺は仰向けになって重々しく頷いて見せた。

「お母さんも、無理やり思い出させるようなことは慎んでください」

「はい、分かりました」

ハンカチを持ったまま、お袋がそう言って頷く。

検査がそれから二日ぐらい続いて、退院できたのは一週間後。

もちろん記憶が戻るわけがなく（何てったって中身はこの俺だからね）、通院することになったが、何とか病院を出ることはできた。

この一週間で俺が知ったことと言えば、要は一人っ子だったこと、親父の仕事は医者だったこと。それから要も医者を目指していること。

気づいたことと言えば、お袋以外誰も見舞いに来ないことかな？  
俺は誰もいない時に、青空からもらった地図を眺めた。

自宅から学校の位置、塾の場所など描かれている。  
「塾？ そんなところに行ってられるかよ」

## 第八話

トントンと軽いノックの音がして、お袋が入ってきた。

何げない様子で地図をしまつて、時計を見る。

時刻は午前七時半。

「要。本当に今日から学校に行くの？　少し休んでからでいいのよ？」

「いいよ。勉強遅れたら嫌だし」

そう言い訳をして、俺は制服に袖を通した。

懐かしい感じ。制服着てたのは何年前のことだったっけ。

朝食はすでに済ませてあるので、お袋に持ってきてもらった鞆を受け取り病室を出た。

「こんなに早く学校に行くの？」

廊下を歩いている俺の後ろを歩きながら、お袋は心配そうに小さな声で聞いてくる。

「だってここから歩いていたら、三十分くらいかかるだろ？」

「歩いて？　何を言っているの、退院したばかりなのに！」

立ち止まって大きな声でお袋が言ったので、廊下にいた人のほとんどが俺たちを見る。

気にせずに歩いている俺の後を、お袋は慌てて追いかけて来た。

「身体が鈍ってるから、歩いていくよ」

お袋の反応を待たずに、俺は病院を急いで出る。

駐車場を出たところで何となく振り返って見ると、まだ玄関に立っ

ていてこちらをみつめていた。

そりゃ、心配だよなあ…これからもっと心配かけるかもしれないと思うと、ちよつと申し訳なく思う。

溜息をついた後、深呼吸をすると空気が冷たい。息が白い…。何か上に羽織ってくれば良かった。

空を見上げると快晴。それにしても、やっぱり寒い。

身体を慣らすようにゆつくりと歩きながら辺りの風景を見ると、  
青空から貰った地図が頭に浮かぶ。

「なるほど」

地図の通りに公園を通り過ぎて商店街を抜け、けっこう急な坂道を登る。

「要くん！ 退院後の身体にはきつくない？」

後ろからそう声をかけられて、立ち止まり振り返ると、緑色のマフラーを巻いた見知らぬ生徒が立っていた。

「えっと…誰だっけ？ ごめん俺、記憶がないんだ」

そう言つとその生徒は一瞬、困った顔をしたけど、その後すぐにニコニコと微笑んだ。

「そうなんだ…。僕、<sup>とびさわ ゆづき</sup>鳶沢勇氣。君と同じクラスだよ。良かった、元気そうで。お見舞いに行けなくてごめんね」

「ああ…別にいいよ」

「えっとね…知らないだろうから言っておくけど、僕は君のお母さんに氣に入られてないんだ。だから、病室の前まで行った事はあったんだけど…」

俺は意味が飲み込めずに首を傾げた。

「氣に入られてない…？」

「あー、えっと。その。僕が地方公務員の息子だから」

「はあ…？ 地方公務員の何が悪い？」

鳶沢は目を丸くする。

その様子が何とも可愛かった。

本人はそう言われても嬉しくないかもしれないけど。

「う、うん。僕もわかんないけど。その…上流階級の人と付き合えって言われてるみたい」

## 第九話

「上流階級？　はあ？　わけわかんねえ。で、俺はその言葉に従ってたわけ？」

「え、いや。その表向きは……」

一応、逆らってたわけだ。

「そっか。ま、今日からよろしく……色々と教えてくれよな」

「……要くん……随分と……変わったね」

「まあね……悪いけど鞆もつてくれるか？」

「ああ、うん。いいよ」

よし、これで鞆持ちゲット！（いや、もちろん冗談だけど）と内心喜んでいると、いきなり真横に大きな黒塗りの高級車が止まった。

「うわあ……高そうな車」

ちよつとだけ感動していると、後部座席の窓が開く。

「やあ、船迫くんじゃないか。退院したんだね、おめでとう」

「……えつと。鳶沢。こいつ誰？」

「こつ、こいつ？」

ギリリと俺を睨みつけて名前も名乗らないそいつは、鳶沢と俺を交互に見た後、鼻で笑った。

「そんな態度でいいのかな？　船迫　要くん」

名前のところをゆっくりと強調して言う。

何となくいけ好かない奴。

「悪いけど、俺、記憶喪失でね。お前が誰なのかわからない」

「おやおや。それじゃあ僕の車に乗って行かないかい？　学校まで色々と教えてやるよ」

こういう奴って本の中だけだと思ってたけど、本当にいるんだなあ。一々腹が立つ奴。

大人気ないけど、思わず言い返してしまう。

「っつーか。お前の車じゃなくて、お前の親の車だろうが」

俺はそいつを見下ろす様に（車に乗っているから、自然とだけど）睨みつけた。

睨むことなら得意だ。

「なっ、何だつて！ これは僕専用で！ 僕の…」

一瞬怯んだあと、慌てたように言ったので最後まで言わせないように口を挟む。

「専用だろっが何だろうが、お前はまだ免許持っていないだろうが。だったらお前の車じゃない」

「要くん…やめた方が…」

鳶沢が止めるのも聞かずに、俺は歩き出した。鼻で笑ってやるのを忘れずに。

うん、ちよつと大人気ないかな？ でも、まあ今は船迫 要なんでもいいかと考えた。

「要くん！」

鳶沢が慌てて追いかけてくる。

「いいの？ 彼と争うと後で面倒だよ」

「あんな奴と一緒にいるほうが面倒だ。なあ、鳶沢。もしかして、あんな奴ばかりなのか？ 学校は」

「え、ええと。そうでもないけど…」

車が俺たちを追い越して行ったが、その瞬間に小さく「覚えてるよ」と聞こえた。



## 第十話

「かつ要くーん…どっどっどーしよう!」

「何が?」

「何がって…」

「行こうぜ。遅れる」

「要くん…君…本当に変わったね」

目を丸くしながら鳶沢が言ったので、俺は笑い出すのを堪えながら歩き続ける。

「ところで、あいつは誰」

「ああ…彼は箱柳<sup>はこやなぎ</sup>修<sup>しゅう</sup>。君のお母さんが付き合うようになって、言ってた一人かな」

「あんなのと?」

俺の言葉にとうとう鳶沢は笑い出す。一頻<sup>ひとしき</sup>り笑った後、涙を指で拭きつつ何とか笑いを治めた。

「う、うん。箱柳君のお父さんが代議士だから」

「何だか俺のお袋もヘンなこと言うよなあ。あれが上流階級の人間か?」

「箱柳君のお父さんは立派な人だよ?」

「親の背中を見て育たなかったんだなあ……あ! もしかしてさ、あいつの母親も俺のお袋みたいな奴なんじゃないの?」

鳶沢は苦笑いして、答えなかった。

「ま、いつか。で、この話の流れから行くと、俺はいじめられるのかな?」

「随分<sup>ずいぶん</sup>…うれしそうに言うね」

俺の満面の笑みを見て、鳶沢は不思議そうに目を瞬かせる。

「ほら、校舎裏に來いとかさ。あると思う?」

「さ、さあ…分からないけど…」

呼び出された時のことを考えてにんまりと笑ってしまふ。

楽しみ楽しみ。

「何だか…要くんワイルドになったね…」

「ワイルドお？ ふーん…これでワイルドって事は要は相当おとなしい奴なんだな…」

「え？」

「あ！ いや何でもない…急ごうぜ」

もうそろそろ学校に着くはずだったから、ちよつとワクワクして急いだ。

急な坂が終わって、緩やかな坂に変わる。それを登って（緩やか  
つてというのが意外と辛い）ようやく校門に着いた。

「鳶沢。鞆、サンキューな。もういいよ」

「あ、うん」

鳶沢から鞆を受け取って学校敷地に一歩足を踏み入れた途端に、  
ものすごい重力のようなものを感じて、俺はその場に膝をついた。

## 第十一話

「だっ大丈夫？ 要くん！」

「何だ…これ」

「ど、どうしたの？ 誰か呼んでこようか？」

立ち上がれない。立ち上がれないどころか、このままだと地面に突っ伏してしまいそうな感じ。

ヤバイ。

かなりヤバイ。

「こんなところで、何やってんの？」

後ろから声がかけられたが、振り返られないし声も出なかった。

「あつ、八潮路くん」

「あれ？ もしかして船迫？」

八潮路と呼ばれたそいつは、おれの右腕を掴まえて引つ張りながら立ち上がらせてくれる。有難い。

ふっと身体が軽くなって、俺は振り返った。

「サンキュー。助かった」

「ん…」

かなり驚いた様子で、そいつが俺を見つめてるのに気づいたのか、鷲沢が慌てた様に喋りだした。

「あ、あのね。要くん記憶喪失なんだって、ほら何週間か入院してたでしょう？ それで、えっと」

「記憶喪失？」

「うん、まあね。ところで名前教えてもらえる？ 全然覚えてないもん」

「オレは八潮路都雅。同じクラス」

そう言って右手を出してきた。握手を交わして俺は八潮路を見上げた。

俺よりかなり背が高い。

髪が要や鳶沢と違って染められていて、ミルクティーの様な色だった。

鳶沢と見比べると、ものすごく正反対な感じ。

鳶沢は随分と可愛いイメージだし真面目っぽい。それに対して、八潮路はずっと大人っぽいけど、何ていうか上手くつかめない感じ。どちらかといえば硬派に近いかな。でもトゲトゲしてなくて飄々（ひょうひょう）としている。

やっぱり制服は着崩してるし、何となく昔の自分を思い出して親近感が湧いた。

「そっか、んじゃ友達になってくれない？ どうせ前の友達覚えて無いし」

「友達……」

鳶沢が今まで以上に目をまん丸にして、口を大きくあぐりと開けた。

「か、要くん……ば、僕びっくり……」

「あ？」

鳶沢の方に顔を向けると、目を瞬かせている。

顔の向きを元に戻すと、八潮路は考え込むようにして、眉を寄せていた。

「オレでいいのかな？ 知らないだろうから言っておくけど、オレは結構アウトローでアウトサイダーなわけで」

腕を組みながら八潮路はそう言って、俺の答えを待っていた。

## 第十二話

「OK、OK！そっちの方が俺としては有難い感じだね」

「そう？　そうか…それじゃ、よろしく」

「こつちこそ、よろしく」

再び握手をして、思い出したように鳶沢とびさわを見ると、固まっていた。

「鳶沢…大丈夫か？」

「う、うん…」

ふうと息を吐いて、鳶沢は目を瞬かせる。

「世紀の一瞬をみた気分だよ」

「大げさだなあ」

「だって、皆もびつくりすると思うよ。優等生の要くんとその…あの…」

鳶沢が言い淀んでいるのを察した八潮路やしおじが、小さく笑った。

「優等生からは反比例のオレが友達になったから…かな」

おお、反比例とはおもしろい表現。

「あ、あの…ごめん…」

「いいよ」

八潮路にやさしく言われて鳶沢はごくんと唾を飲み込んだ。

「今日は…驚くことばかりだよ…要くん」

何故そんなに驚いてるのは分らないが、どうやら以前の要は八潮路と仲良くしていなかったみたいだな。

驚いている勇気をほっておいて、都雅の方を向いて俺は笑って見せた。

「ってなわけで、都雅って呼んでもいいか？」

「ん、いいよ。それじゃ、オレも要って呼ばせてもらう。ところで、身体からだは大丈夫か？　なんだったら負ぶってやるうか」

「いいや、大丈夫。教室まで案内してよ」

「わかった」

「あ、待つてよ。置いていかないでー！」

歩き出した俺たちの後を、慌てた様に鳶沢が追いかけてくる。

「そういえば、鳶沢は俺のこと要って呼ぶんだな」

「あ、うん。ダメだったかな…以前からそう呼んでいたから」

「別にいいけど…俺は何て呼んでた？」

「勇氣くんって呼んでくれてたけど」

勇氣くん…ね。

「勇氣でいいだろ」

「あ、うん。いいよ」

歩きながら、俺と都雅の丁度中間の、後ろを歩いている勇氣の方を振り返った。

「何、遠慮して歩いてるんだ？ 隣り来いよ」

「あ、えっと…あんまり横に並んで歩くのは…」

「狭い歩道じゃないんだから、いいだろう」

なあ？ と隣りにいる都雅に同意を求めると、都雅は小さく笑った。

「鳶沢は距離を測りかねてるんだろうさ」

「距離？」

勇氣は慌てた様に、首を横に振り両手を大げさなく左右に振る。

「ちっ違っよ…」

その慌てぶりに、俺は何となく納得した。

「あー、悪い。急に変わった俺に付いて行けないってことか。ま、仕方ないか」

「違っつたら」

「勇氣くんだって、もとの要と同じ様に優等生だったんだろう？」

そう俺が言っと、勇氣は涙目になっていた。

「違っつてば！」

勇氣が泣き声混じりでそう言った時、俺の隣で都雅が再び小さく笑った。

「それ以上、苛めるのはやめなよ」

「苛めてないって」

「オレが言った距離ってのは、要とのじゃなくて、オレとの距離ってことだよ」

「都雅との？」

都雅の顔を見ると、深く頷いた。

「約二年間同じクラスだったけど、ほとんど喋ったことないし。小等部の時からアウトロー的なところがあつたからね。ほら、触らぬ神に祟りなしっていうだろう？ あいにくオレは神じゃないけど」

ふむふむ…と納得しつつ、最初の言葉に引っかかりをおぼえて、俺は首を傾げた。

### 第十三話

「約二年間…って。え？ 俺たち高校一年生だよな？ 去年の話？」  
中等部と高等部を一緒に言うか？ あれ？と思いつつ二人の顔を見つめた。

俺の言葉に都雅と勇氣が顔を見合わせる。

「もしかして全部忘れちゃったの？」

「……ってことは高一じゃない…？」

「まあ…間違っではないかな。今年の春から高等部だから」

青空の奴…きちんと説明して行けよ！ 高校一年って言ってたじゃないかっ！

次にあつたら、絶対文句いつてやる。

溜息をついて、俺は二人に説明を求めることにした。

「悪い…説明してくれないか」

「うん。ええと、まず僕達は今、中等部三年生です。この学校は小  
等部から高等部の一貫教育男子高校なんだよ。あ、ちなみに学年末  
試験は終わってるからね」

勇氣の言葉に俺はホッとした。試験は受けなくてすんだなら、何  
とかなりそうだ。

「後、二ヶ月ちよつとで高等部の校舎に移動だけど…もしかして現  
在の日時を把握していないということかな？」

都雅が口の端を少しだけ上げて笑いながらそう言った。

「……後二ヶ月ちよいでってことは…今、二月だよな…え…何でこ  
んなに寒いんだ？」

俺の言葉は相当、変に聞こえたらしい。目を丸くした後、都雅と  
勇氣は再び顔を見合わせた。

「二月って寒いでしょう？」

「寒いけど…でも寒すぎないか？」

そう言つと、立ち止まった都雅がいきなり鞆から地図帳を取り出



して、開いて見せた。

俺と勇気も立ち止まって地図帳をのぞく。俺が使ってた（いや、当時あんまり使ってなかったか…）地図帳より綺麗で見やすくなっている。

「オレ達の住んでるのはここ」

都雅が指したその場所は、俺（三刀屋 鋼樹）が住んでいた場所から遥か遠い北に位置していた。

「……え…マジ？」

都雅と勇気は真面目な顔で頷いた。

「引っ越してきた…とか？」

「要くんは生まれも育ちもここだって聞いてるけど」

啞然としている俺を見て、都雅は地図を閉じて鞆にしまう。

「本当に覚えてないんだな…」

「ちよつと待て…なら、なんで都雅も勇気もコート着てないんだよ」

「今日はいつもより暖かいんだよ？」

暖かいという言葉に驚いて、俺は身震いする。

「これで？」

「昨日は平年の気温だったからコート着てたよ。でも、今日は三月下旬くらいの気温だって、天気予報で言ってた」

この寒さで三月の気温？

「明日から天気が崩れるって言ってたから、また寒くなるよ」

「かぁーっ！…何でお袋はコートくれなかったんだよっ…」

都雅は俺の様子に、シニカルに笑った。

「車で送るつもりだったからだろ」

「うわーっ…失敗したっ」

後悔先に立たず…。

「勇気も都雅も、寒さを我慢してるのかと思ってたのに…」

「いくらオレでも、寒かったらコート着るよ」

何でだか分からないけど…なんとなく敗北感。

同じ日本なのに、何なんだこの気温差は！

「箱柳くんの車に誘われた時、乗っていれば良かったのに」

勇氣がそう言ったので、俺はむっとして早足で歩き出した。

「要くん！ 怒ったの？」

「当たり前だろ。あんな奴の車、猛吹雪の日だって乗るもんか」

都雅と勇氣が後ろから付いて来る。振り返ると二人は並んで歩いてた。箱柳と俺のやりとりを、勇氣が都雅に説明している。何だ、もう慣れたのか。

「以前の要くんなら乗ってたよね」

などと言うので、勇氣の首に腕を回して力を入れた。

「わっ！ 苦っ苦しいっっ」

「変なこと言うからだっ」

力を抜いて腕を解くと、勇氣は都雅の後ろに隠れた。

「本当なんだってば…前の要くんはそうだったんだよ」

目を潤ませて泣きそうになりながら勇氣は反論する（ただし都雅の後ろに隠れたまま）。

「そうなのか？」

都雅に聞くと、黙って頷いた。

「仲がいい…という訳じゃないけど、いつも同じグループにいた…  
というか、いるようにしてた…かな」

「ふうん…何で？」

都雅は後ろに隠れている勇氣を自分の前に引っ張って来て、両肩をポンと軽く叩く。

「えっ、えーっ 僕が言うのーっ？」

俺は両手を腰に当てて勇氣の言葉を待っていたが、あまりの寒さにくしゃみが出てしまった。

「はっ…くしゅんっ…うー、寒い」

「と、兎に角。中に入ろうよ、ね、ね？」

「うっ…仕方ない」

## 第十四話

生徒玄関に入ると、外とは比べ物にならない程、暖かった。

「うわー…天国…」

都雅と勇氣は俺の言葉に苦笑した。

「教室の方が暖かいよ…まあ…ある意味暑いかも」

「暑い？」

「うん…ヒーターの真横だと暑すぎて窓開けちゃう時あるよ。反対に廊下側だと寒いんだ」

「へえ…」

上履きに履き替えて、階段を上る。

「教室は二階なんだ。……何だか転校生を案内している気分だね」

「ま、似たようなもんだよな…俺にしてみれば初めて来るわけだし」

三年生の階に付いて、真向かいのクラスが六組。

「何組あるの？」

「八組あるよ。僕らは一組。一組はね、成績優秀じゃないと入れない組なんだよ。二組以降はシャッフルなんだけど、一組は特別なんだ」

「……ってことは都雅も成績優秀なのか？」

「まあ…ね」

「うわ…反則…」

都雅は小さく笑った。

「反則ってなにさ」

「だって、不良で成績優秀って反則だろう…番長か？」

「……古い、物言いだな…今時番長なんているのか？」

いるかもしれないじゃないか…とは言わずに笑って誤魔化す。しまか

「オレみたいな奴は殆どいないよ。その点では結構珍しい学校だよな。でもそれよりもっと面倒なのがいるけど」

「面倒なの？」

そつだね…と勇気が深い溜息をついた。

「ま、要はオレの友達だから、何があっても助けるけどな」  
都雅は白い歯を見せて笑った。

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか。サンキュー」

右手に折れて一組へと向かう。

教室に入ると、すでに数名の生徒がいて、その中に箱柳もいた。

「何だ…あいつも同じクラスかよ…」

俺たちが入ってきてても、無視している。

幼稚な奴。

入ってすぐの席（つまり廊下側の一番後ろ）に都雅が座った。

「オレの席はここ」

「俺の席は？」

「要くんの席は、窓際が一番後ろだよ」

「ああ…なるほど…。さっきのヒーターの説明は、そのためか…」  
「うん」

勇気の席は真ん中の一番前…つまりは教壇のまん前だった。

## 第十五話

「すごい席だな…」

「でも灯台下暗しで、何やってても意外と見つからないよ？ たまに漫画読んでるけど、怒られたこと一度もないし」

可愛い顔して意外な奴。いや、顔は関係ないか…。

「授業中漫画読んでて、成績優秀かよ…」

「あ、別に全部の授業で読んでるわけじゃないよ？ ほら、立川先生<sup>たちかわ</sup>の授業とかさ」

「立川？」

「あ、ごめん。覚えてないんだったね。えっと歴史の先生。黒板に書くことって教科書と同じなんだもん。漫画読んでても支障はないよ。いい先生なんだけど…、授業はツマンナイんだ」

何となく想像できる授業風景…。懐かしさ満開だ。俺の場合、ほぼ全授業そうだったし。

ガム噛んでる奴いたし、弁当食ってるやつとか、携帯ゲームやってるやつとか…。寝てるのが殆どだったような気がする。

さすがにこのクラスには、そんな奴はいないだろうけど。

それにしても、この空気の馴染め安さつたらない。もしかして俺、高校生から成長してない？ 一応二十代んだけどなあ…。

自分の席に鞆を置いて、都雅の席に遊びに行くと、勇気も鞆を置いてこちらへ来る。

都雅の席の隣りの椅子を勝手に借りて座った。勇気は座らずに、黒板側に背を向けて机と机の間にある通路に立っている。

「都雅<sup>とが</sup>と話すの、慣れたか？」

「うん、今日は驚いてばかりで、すっかり。こんなに普通に話せると思ってなかったよ」

「ふうん…そんなに都雅は怖かったのか？」

「怖かった…っていうか、八潮路くん<sup>やしろ</sup>は僕らに無関心って感じだった

「ただよ」

都雅を見ると苦笑している。

「無関心？」

「そう、こんなに話す八潮路くんを見たのは、今日が初めてだからね。いつもは何が起きてても、何もなかったから」

「へー……いまいち分かりにくい……説明」

「ごめん……えつとね……うーんと……。例えば、教室で誰かが倒れたとするよ？」

「凄い例えだな……まあいいか。それで？」

「教室には僕と八潮路くんしか他にいなくて、倒れた人を助けなきゃって思うでしょ？ でもそういう時、八潮路くんは決して助けてくれない。助けを呼んで来てもくれない……感じ……。えつと……大げさに言うんだけど……」

少し怯えた感じに言い終わって、勇氣は恐る恐る、都雅を見る。

都雅は別に怒った様子も無く。

「大げさどころか、その通りだと思うよ」

と言った。

「口も利かない事が多いしね。繋がりがなければ、オレにとって塵<sup>ちり</sup>も同然だから」

「うわ……うわー。凄い発言」

二人の会話に勇氣は首を傾げた。

「えつと……それじゃあ、どうして僕と話をしてくれるの？ 今まであまり話したことないのに」

「友達になった要の、友達だから。要の友達は、オレの友達であると同義」

「うわー。んじゃ、校門で俺を助けた理由は？」

俺の質問に都雅は少し躊躇<sup>ちゅうちう</sup>した様子で、一瞬俺から目を逸らした。

「……借りがあったから……」

「借り？ 俺に？」

それ以上、都雅は何も言わなかった。

「ふうん…ま、いつか。んじゃ、勇気も友達なわけだから、都雅って呼んでもいいんだな？」

「もちろん」

都雅は即答する。

「えっ…」

勇気は一步後ろに下がった。

「都雅は勇気って呼ぶってことで、いいよな」

「ん、いいよ」

これもまた即答。

「えっ…ええっ…」

勇気はもう一步下がる。

「何だよ。嫌なのか？」

「そうじゃないけど…いいの？ 本当に？」

ずいっと接近した勇気の勢いに、気圧された都雅が驚いたように返事をした。

「も、もちろんいいよ」

「うわー、嬉しいなあ…、名前で呼び合うつて、友達って感じするよね。勉強を教えてもらったりしたかったんだ」

「へえ…都雅って、そんなに頭いいの？」

「都雅くんはズーッと首席なんだ」

「首席？ ずっと？ まさか…小等部から？」

「うん」

首席…つまりは学年一位。

「うわ…やっぱり反則だよ…都雅」

「………どんなルールだ、それは」

呆れたように都雅は笑って、自分の前髪を引っ張る。

「こんな髪（ミルクティー色の髪）でいられるのは、その事があるからさ。さすがに学年首位の生徒を、追い出すわけにはいかないだろうっ？」

「ははあ…へえ…」

感心しつつ横目で勇気を見ると、なにやら一人でうつとりして  
いる（ちよつと怖い）。



## 第十六話

それにしても、学年末試験けっこう早いんだな。この学校」

「まあ…エスカレーター式だしね」

肩をすくめながら都雅が言う。

「結果は？ もうでてるのか？」

勇氣と都雅<sup>とが</sup>が、同時に無言で頷いた。

ちよつとドキドキする。要の試験の結果はどうだったんだろう。

「ちなみに、もう高等部のクラス分けも発表されてるよ」

勇氣の言葉に、俺は驚いて椅子から落ちそうになった。

「はあ？ いくらなんでも早すぎないか？」

「一応、仮のだけだね。他の学校に転学する人もいるから」

「で…その…俺のは？」

「あ、えつと。ちよつと、待つてね」

勇氣が一度自分の席に戻って、鞆の中から折りたたんだ紙切れを持ってきた。

「ええと、要くんは学年七位。高等部でも同じクラスだよ」

と、いうことは受かっているわけだ。エスカレーターだと分かっているても、試験と聞くと恐怖が思い起こされる。

「そ、そうか…」

軽い脱力感。ホツとしていると、左側から声をかけられた。

「あ、あのー。船迫くん…、席変わってあげようか？」

声のした方を見ると、少し怯えた風の生徒が立っていた。

「あ？ ああ。悪い。ここ、お前の席？」

「え…あ、うん。そうだけど…」

勇氣の方を振り返って首を傾げて見せると、気づいて名前を教えしてくれる。

「彼は江上くん。江上 宗也くんだよ」

「ふうん…そっか。悪いな、今、退けるから」

「あ！ いや、いいんだ。僕があっちに行くよ」

「いや、でも悪いし」

「良いんだ、じゃ、じゃあ」

慌てた様に窓際の席へと行ってしまう。

「何だよ…良いのか？ かつてに席変えて」

「構わないだろう。卒業まで間もない事だしね」

都雅がふわりと優しい顔でそう答えた。ふむ。男の俺から見ても美形だし、こりや女にモテルだろうな…羨ましい…などと、つい思ってしまった。いかんいかん。

「あ…僕が鞆持ってきてあげるよ」

勇気がニツコリと微笑んで窓際へと歩いて行く。

「おお…サンキュー。助かるよ」

勇気が窓際の席から、俺の鞆を持ってきてくれた。ほんと、気が利く奴。

持つべきものは友だと、都合のいい解釈をしつつ。受け取った鞆を、机の横のフックに掛けた。

とうとう始まりのベルが鳴る。

懐かしいその音が、自分の身体を捜す、始まりのベルでもあるのかもしれないと、そう思った。

## 第十七話

ホームルームが終わり短い休み時間の後、授業が始まる。授業といっても、テストが返ってきて答え合わせだけだったけど。なるほど。

学年七位にもなると、満点に近い点数だ。

っていうか…全然わからないんですけど…大丈夫か俺。

かなり高校生活に不安を感じつつ、後で青空に聞いておこうと思った時に、俺はようやく青空との連絡の取り方を知らない事に気付いた。

遅すぎるけど。

「……どーするんだろ…」

「どうしたの？」

隣で都雅がクロスワードパズルの本を開いて、解きながら（何しろ満点だから答え合わせなんて必要ないわけだ）そう聞いてきた。

「あ、いや。ちょっとね」

「困りごと？」

「うーん、ちょっと困りごとかな。でも、まあ…何とかなるのかな」

「ふうん……ま、要がそう言うなら、そういう事にしておこう。それより、答えならオレの答案用紙貸そうか？」

「あ、助かる。黒板の字は、ミミズ這ってるみたいで、読みづらい。どうせ説明聞いたって、チンプンカンプンなわけだから、都雅の答案用紙を借りて、バツテンがつけられたところに答えを書くことにした。」

「今日は一日、こんな感じかな」

「そうだね。学年末試験も終わったから、こんな感じかな」

他の答案も、都雅から借りようと心に決めて、三つ、間違った答えを写す。

「ほい、サンキューな」

「どういたしまして……」

都雅は自分の答案用紙を受け取りながら、俺の答案用紙を見て不思議そうな顔をした。

「記憶喪失になると、字まで変わるんだね……」

「あ？ あ、ああ……そ、そうみたいだな」

ノートに書かれた要の字と比べると、俺の字はかなり硬い字だ。明らかに違う。

何か言われるかとひやひやしたが、都雅からはそれ以上何も言われなかった。

都雅は鞆を開けて、答案用紙をしまう。その時見えた鞆の中身は、殆どがパズルの本だったのには驚いたが、まあ都雅らしいっていえば都雅らしいか。

「要」

「んあ？」

「さつきから気になってること、聞いてもいいかな」

「なんだよ」

「あそこにいる猫。何だと思う？」

都雅が指差した場所は、教卓の上。

そこに真っ黒い猫が、ちゃんと座っていた。

「だっ……大治郎……？」

俺の声で、教室の全員が教卓に乗っている猫に気付いたらしく、教師が驚きつつ追い払おうと教科書を振り回す。

大治郎はその攻撃を軽やかにかわしつつ、机を飛び移り渡り、俺の机に乗った後、俺の肩に飛び移って耳元で囁いた。

「昼休み、屋上」

それだけ言っつて、大治郎は床に降りた。

教室は逃げようとする奴と、捕まえようとするやつで、めちゃくちゃになっている。箱柳のやつは明らかにビビって、教室の隅に逃げていた。

都雅がドアを開けると、大治郎はするりと抜けて、教室を出て行

く。廊下を覗くと、ゆらゆらとゆれる尻尾がみえた。

誰もそれ以上深追いせずに、何事も無かったかのように授業を再開。

したかに見えたけど、やっぱり教室はざわついたままだった。

「さっきの猫、だいじろうつて言うの？」

「あ？ ああ、うん」

「要の猫？」

「あ、いや……えーと。知り合いの猫」

「ふーん……」

都雅はそう言った後、本当に何事も無かったかのように、クロスワードパズルを解き始める。

それにしても、放課後でも良かろうに……大治郎。

でも、退屈な雰囲気が少し減ったので、感謝かな？

教室を見渡していると、勇気と目が合った。こちらを見ていた様だったけど、俺と目が合うと、さっと前を向いてしまった。

## 第十八話

俺が首を傾げると、都雅が隣で小さく笑う。

「何だよ」

「さっきの猫も、同じように首を傾げてたからさ。思い出しちゃって」

「え？」

「教卓の上に乗っちゃって、しばらくこっちを……っていうか、多分、要を見てたと思うけど。その時、誰も自分に気付かないことを不思議に思ってたんじゃないかな？　こう……首傾げてたよ？　もちろん一番気付いて欲しいだろう、要も含めてだけどね」

俺は首を元に戻すと、ため息を吐いた。

「悪かったな……鈍感で」

そういえば大治郎の奴、何処から入ってきたんだろう。窓は全部閉まってるし、ドアだってきっちり閉じられていた。まさか、病院の時みたいにしり抜けて来たのか？　でも、すり抜ける瞬間を見られたら危険だよな。

「何、考え込んでるの」

都雅はクロスワードをやっていた手を止めて、身体をこっちに向けてると、右腕で頬杖をついてそう言った。

「あ、いや。さっきの猫」

「大治郎？」

「ああ、うん。その大治郎さ、どうやって教室に入ったのかなーと思うって」

左手で、さっき教師が入ってきた前の方のドアを指した。

「先生と一緒に、入ってきたよ」

「……そんな時に、言えよ」

「何で猫が入ってくるのかなとは思ってたけど。まあ、オレには関係ないことだし」

「あのなー。っていうか…マジ？　それで誰も…いや俺もだけどさ…気付かなかったのか…うわ…ちよつと…びっくり」

俺が身体を反らせてそう言つと、都雅は楽しそうに笑う。

「要といると、退屈しなくてすみそうだね。高校生活が楽しくなりそうだよ」

「何だよそれ」

「一応、ホメ言葉」

都雅は目を細めて微笑んだ後、黒板の上にかかっている、丸いアナログ時計を見た。

「もうそろそろ終わるけど、次の授業どうする？」

「どうするって…？　あ？　何？　それはエスケープのお誘いか？」

俺の言葉に、都雅は肩を震わせて笑った。

「何だよ…」

「ごめ…っ…。笑うつもりは…無かつただけ…」

口から、くつくつと短い笑いが漏れる。何とかその笑いを抑えて、都雅が顔を上げると、なみだ目になっていた。

そんなに笑うことないじゃないか…。

俺の抗議の視線に、都雅は深い深呼吸をした後、ようやく話はじめた。

## 第十九話

「次の時間は自習なんだ。だから、どうする？　って聞いたんだけど」

「ああ、何だ…自習か」

ちよつとがっかりして、机に両腕で頬杖をついた。

「あと次の時間は自習で、そのあとの二時間はテストが返ってきて、その後は、下校。って感じだよ」

「え…ということは、午後からの授業は無いのか？」

「無いよ」

それじゃ、昼休みじゃないじゃないか…とも思っただけ。まあ、昼に屋上に行けば良いわけで。

「ああ…それでお袋は、弁当を持たせなかったのか…」

「昼ごはん食べたいなら、学食があるよ。もう、そんなに寄る事もないだろうし、帰りに寄ってく？」

「あー…金、持って来てたかな…」

制服のポケットには入っていないことは、確認済み。と、なると。鞆しかないわけだ。

俺はおもむろに鞆を机の上に載<sup>の</sup>せると、開いて中を覗いてみた。

「あ、これかな」

財布を発見。でも中身が分からん。

恐る恐る開けて見ると、おお！　さすが金持ちの財布は違う。俺こと三刀屋　鋼樹の財布の中身の倍は入っている。下手したら三倍か…？　うう…。

そういえば、久しぶりに自分の名前を思い出したことに気付いて、要という名前に慣れている自分に、少し驚いたりした。

「寄ってける？」

「あ？　ああ大丈夫」

「どうした？　ぼんやりして」



「ちょっと…ね。大事な事…思い出した…ってとこかな」

要に入っていないのは、一年未満だ。

学校の雰囲気や友達と話すのが楽しくて、忘れてたけど。

俺は…三刀屋 鋼樹で、船迫 要じゃない。

身体を捜さないよ。

俺は思わず、深い深い溜息を付いてしまった。

「もしかして、身体辛いのかな？」

「あ、いや。大丈夫」

「無理しない方がいい。少し顔色悪いよ」

「ああ…うん。ありがと」

その時、丁度ベルが鳴って、一時間目が終わった。

教師が出る前に俺は勢い良く立ち上がると、教室を出て階段の横にあるトイレに駆け込んだ。

鏡の前に立つて、顔を眺めるためだ。

船迫 要の顔。

見慣れた俺の顔じゃない。

そう確認したと途端に、まるで拒否反応のように、身体が苦しくなった。

息をするのが苦しい。

そんな時に、あの箱柳が入って来るのが鏡越しに見えた。箱柳を含めて三人…いや四人はいるかもしれないけど、もう確認できない目がかすんできた。兎に角、数人で俺を取り囲んだ。

「今朝の態度は何だ？ 船迫」

お前に構っているどころじゃないって。

ヤバイ。耳鳴りする。

「高等部に行っても同じクラスなんだからな…、分かってるのか？」  
箱柳の横にいた生徒が、俺の胸倉を掴んだ。

## 第二十話

ちくしょう…こんな時じゃなかったら、振りほどけるのに。

「箱柳<sup>はなやなぎ</sup>さんが、質問しているんだぞ！ 答える！」

力が出なくて、そいつに振り回されるままになっていた。

「何してるの？」

都雅の声。

「何だ、八潮<sup>やうせう</sup>路か。お前には関係ないだろう」

「それが、関係あるんだ。今朝、友達になったんでね。その手、離れたほうがいいよ」

人が動く音がした後、俺の胸倉を掴んでいた手が離されて、俺はその場に崩れそうになった。

誰かが、抱きとめてくれて倒れずにすんだけど。

「と…が？」

何とか息をついで、名前を聞くと、小さく返事が聞こえた。

「見ての通り、要は具合が悪い。それとも、そんなことも分からないのかな、君たちは」

「何だと？ 八潮路。お前が今まで平穩に暮らして来れたのは、誰のおかげだと思っている」

箱柳の周りにいた誰かが、そう言った。その言葉に、都雅は小さくバカにするように笑う。

「保護者のお陰だろうね？」

「バカかお前はっ！ 箱柳さんが、お前を範疇<sup>はんちゆうがい</sup>外に置いて下さったからだろうが」

おうおう…同級生にむかって“下さった”だってさ。具合の悪い俺でも、思わず突っ込み入れなくなっちゃったよ。

「こっちからお願いはしていないけど？ 退かないなら、それなりの手段にでるよ」

そう言つと、都雅は俺を背負った。

「都雅…っ」

「大丈夫？」

「何とか…」

「もうちょっと我慢して」

そして都雅は突然、大声で叫んだ。

「あっ！ 猫だっ」

## 第二十一話

「なっ、何っ」

全員が注意をそらされたく、その隙にできた間をぬって、トイレを出たらしかった。

廊下に出た気配。箱柳たちの声が遠ざかっていくのが分かる。

都雅は俺を背負ったまま階段を一階まで駆け下り、保健室に運んでくれた。

「先生！」

「どうしたの?! とにかく、ベッドへ」

保健室のベッドに寝かされた俺は、少し楽になったために、都雅に笑って見せた。

「猫だ…は良かったな」

都雅は、俺が軽口をたたけるようになったと気付いたのか、ほっとして側にあつた椅子に座る。

「箱柳が、さっきの猫騒動におびえていたからね。多分、うまくいくだろうと思って」

制服の上着を脱いでハンガーにかけてもらい、シャツのボタンを二つ、自分で外した。

「サンキューな。楽になっただ」

「そう…? それなら良いけど。退院したばかりなんだろう? 無理しないほうが良い」

「まったく、本当よ」

そう言って、ベッド周りのカーテンを開けながら保健室の先生が入ってくる。

「八潮路くん。もうすぐ授業が始まるから、教室に戻った方がいいわね」

「はい」

都雅はそう言って立ち上がると、俺を見下ろす。

「テストは受け取っておくよ。また後で」

「ああ、悪いな」

軽く手を振って、都雅は保健室を出て行った。

「さて、船迫くん」

「何？」

「何？　じゃないでしょう。保護者の方に連絡して欲しいの？」

「うわっ、ごめんなさい。連絡しないで下さい」

「本当は…呼びたいところなんだけど」

「ほら、もう元気だし」

先生の白衣の胸元に付いているネームプレートに、《朝来》と書かれてあるのを見つけた。

「あさき？　ちようき？」

「え？　あ、名前？　これはね《あさら》と読むの」

「へえ…あさらですか。下の名前は？」

「すっかり元気になったようで、先生も嬉しいわ」

そう言って、朝来先生は苦笑する。

「やせ我慢も程ほどにね。まだ少し顔色が悪いようだから、眠るといいよ」

「どうも…」

朝来先生はベッド周りのカーテンを閉めて行ってしまった。

## 第二十二話

授業が終われば、教室に戻れるだろうし。ここは眠っておこうと、俺は決めた。

そう決めて、すぐに何処でも眠れるのが俺の特技の一つ。  
しかしだ。

目が覚めた時、すでにお昼だったのには、驚いた。

三年生の今日の日程はすでに終わっていた。都雅と勇気が迎えに来てくれて、ようやく目を覚ましたのだった。

「御世話になりました」

制服を着なおしながら、カーテンを開けて朝来先生の前に出た。

「あら、顔色も良くなったわね。帰りは気をつけてね」

「はい」

勇気から鞆を受け取って、保健室を出る。

「大丈夫？」

勇気が心配そうに、俺の顔を覗き込んだ。

「こんだけ寝れば大丈夫だよ。自分でもびっくりするくらい、寝ちまった…」

「それじゃ、学食寄れるかな？」

「ああ、大丈夫だけど、ちょっとその前に用事があるから、先に行つてくれよ」

「えっ、あつ。僕も用事あるんだけど」

「そう？ 偶然だね。オレもなんだ。それじゃ、学食で待ち合わせようか」

俺が頷くと、勇気はぎこちなく笑って先に走って行ってしまう。

「何だろう…さっきから勇気の状態、変じゃなかったか？」

「んー……ところで、学食の場所分かる？」

「ああつと、そうだった」

都雅から詳しく聞いた後、短くお礼を行って急いで階段を上る。

駆け上りたかったが、さっきのこともあるから急ぎ足。

箱柳が残っていると厄介なので、辺りに気を配りながら三年のフロアを通り過ぎ、屋上へと階段を上った。

## 第二十三話

屋上のドアは鍵がかかっていなかった。

ノブを回して屋上へと出ると、何故か勇気が立っている。

しかも、後ろから都雅の声がして、俺は振り返った。

「……いつもなら、鍵かけられてるのにね」

「都雅…勇気？」

「ほら、屋上に出て。鍵閉めるから」

都雅に背中を押されて、俺が勇気の側に行くと、都雅は屋上のドアの鍵をかけた。

「これでよし」と。さて、不思議そうな顔してるね？ 要」

「だって…何で二人とも…」

勇気と都雅の顔を交互に見ると、勇気は困った顔をして見せた。

「僕…空耳かとも思ったんだけど…。『昼休み、屋上』って聞こえたんだ」

「……都雅も？」

「うん、まあね。まさか猫が喋るとは思わなかったからさ。要の…腹話術かと…思ったよ」

某芸人さんの様に、声が遅れて届くまねを都雅がして見せた。

「できないって…」

「そう？ それなら…やっぱり猫が喋った…という事かな」

「え…っと…」

「猫？ 猫の声だったの！」

勇気が目を見開いて、俺を見つめる。

「え、その…どう説明していいやら…」

こんなに部外者がいたんじゃ、大治郎は出てこないだろうし…どうしよう。

「猫がしゃべっちゃ、悪いかい？」

そう声がして、屋上の手すりの上に大治郎はいた。



勇氣は口をポカンと開けて驚いているし、都雅は目を瞬かせている。

「どうやらさっきみたいで、二人にも見えているらしい。」

「前みたいに、他の奴には見えないようにできなかったのか？」

俺がそう言くと、大治郎は手すりを下りて、俺たちの足元に歩いてきた。

「残念ながらできなかったんだよ。結界のせいだね」

「結界？…っていうか、そんな話、二人に聞かせていいのか？」

「どうやら、おいらの声が聞こえたようだし…良いんじゃないの？」

大治郎の言葉に俺は脱力。

でも、巻き込むわけにはいかない…と気力で俺は大治郎と二人の間に立って、ちよつと怖い顔をしつつ二人の顔を見つめた。

## 第二十四話

「巻き込みたくないから、屋上から出ていってくれないか」  
勇気が衰しそうな顔をした横で、都雅は反対ににっこりと微笑んだ。

「説明もなしに、オレが去ると思う？」

「……思わない……けど！ でもさ……」  
「友達でしょ？」

思わず視線をそらしてしまう。

友達。

たった一日だったけど、楽しかった。あの頃に戻れたようで、でも、俺は戻れない。俺自身の高校時代には。

俺は決心して、二人を見た。

「俺が、本当は船迫 要じゃなくても？」

都雅はいきなりぷーっと吹き出した。

「嘘じゃない！ 俺は……」

「違う違う、知ってるよ……っていうか、うすうす感じてた」

「え……」

「記憶喪失って言ったって、変わり過ぎだし。ほら、地図の時。あの時から、おかしいなと思ってたんだ」

勇気だけがまだ、あんぐりと口を開けていた。

「ええっ……要くんじゃないのお？」

と、ようやく口を開いたかと思うと、その場にへなへなと座り込む。

「身体は要だけど、中身は三刀屋 鋼樹。ついでに言うと、二十代後半です」

「ええっ……」

「へえ……」

二人の反応は正反対だった。

「そろそろ良いかなあ…こつちも話、始めたいんだけどね」

「あ…ええと。そういうことだから、どうする？」

「オレは残るよ」

都雅は考える間もなく、そう答える。

「借りがあるって、以前言ってたけど、あくまでも要にだろ？」

「まあね。でも、今は君と友達になったんだし。友達になった以上、守るって…言つたでしょ？」

「命を懸けることになってもか？」

「もちろん。繋がりができた以上、君が何と言おうとオレにとって友達に変わらない。誓いは絶対だ」

「……マジで？」

「嘘は言わない」

俺は座り込んでいる勇気を見下ろした。

「勇気」

「……い、命懸けられるかなんて…分からないよ…っ…。で、でも、僕だって友達だもん。要くんじゃないって言われても、良く分からないし、理解できるかどうか分からないけど…でも、今日、僕、楽しかったんだ」

「うん…俺も楽しかった」

「友達でいたいよ…僕。都雅くんみたいに役には立たないかもしれないけど…でも、僕だって友達でしょう？ 友達でいてくれるよね？」

## 第二十五話

泣きそうになりながら、勇氣が俺を見上げてそう言った。

「本当にいいのか？ 命を懸けるっていうのは、大げさに言った事だけど…でも、大変なことに巻き込むことになると思う」

「命懸けなくてもいいの？」

「…分かんないけどさ」

後ろで、大治郎がやれやれといった感じに、ため息をついた。

「ちよつと、面倒なことになっているのは間違いないけど」

振り返ると、大治郎はトコトコと俺の足元に歩いてきて、勇氣の手を舐めた。

「お前さんはどうやら耳がいいらしい。あの場所からおいらの声が聞こえたんだからね。協力してもらえると、おいら達も助かるなあ」  
「本当？」

大治郎は勇氣に向かって、頷いて見せた。

「さて、二人の協力者ができたところで、説明に入るよ」

俺はため息をつきながら頷いた。

もう、なるようになれって感じた。

「おいらが他の人間に姿をさらした理由は、実は結界にあるんだ」

「結界？ さつきも言ってたよな」

「うん。結界のせいで、姿を隠して入れなかったんだ。それで、青空たちは中に入れない。そこで猫の姿をしているおいらが、入る事になったわけ」

「ああ…なるほど。でも、ちよつと待てよ。青空だったら制服着れば、ばれずに入れるんじゃないのか？」

大治郎は首を横に振った。

「そうも行かないんだな。こちら辺に張られている結界は古いものでね、結構強いんだ。青空たちが一步足を踏み入れれば、身体にかかっている術が全部解けて、物凄い格好になるだろうね。制服着た

って誤魔化せないさ。お前さんの気が途中で遮断された……って言うのも、この結界のせいらしい。中に入ってみて、どうだった？」

物凄い格好つてのが気になったけど、大治郎が『物凄い』に力を入れて言ったので、怖くて聞けなかった。

## 第二十六話

「校門のところで物凄い圧力を感じた後は、何もなかったかな……。気づくのも見つかったくない」

「そうか……。やっぱりここじゃないんだなあ」

俺と大治郎は同時にため息をついた。

「あの……。話の途中悪いんだけど。オレたちには説明してくれないのかな」

「あ？」

「結界とか青空とか言われても……。ね」

都雅の視線を受けて、勇気も深く頷いた。

「ああ……。そっか、悪い。えっと……。えーと。何から話せばいいのかな」

「船迫 要の身体に入った理由ってのを聞かせてくれないかな」

「あ……。話してもいいのかな……。大治郎」

足元にいる大治郎に尋ねると、大治郎は首を傾げて小さくため息をつく。思わず同じように首を傾げてしまった。

「話さないと、次の話ができないから……。まあ仕方ないなあ」

「ええと、俺も実はよく分かってないところがあるんだけど。俺の身体が盗まれたみたいなんだ」

「……。盗まれた？」

「そう。んでもって、隠されちゃったから戻れないんだよね」

俺の話では、やはり理解は難しいらしい。

二人とも首を傾げている。どうやら俺だけじゃなく、二人まで大治郎の影響を受けてしまったみたいだ。

「盗まれて……。隠された……。？」

勇気は一生懸命理解しようと考え込んでいたが、しばらくして諦めたのか肩を落とす。

「よく分からないけど……。面倒なことになっているって、さっき言ってたよね。大治郎」

大治郎は都雅の言葉に、小さな身体がぴょんと跳ねた。

「ああっ！ また呼び捨て……はあ、やっぱり猫になるんじゃないかな  
ったなあ……」

そう呟いて、大治郎は俺たちを見上げた。

「なんだよ。青空だって大治郎の事、呼び捨てじゃないか」

「だって青空はおいらより年上だし、相棒だからいいんだよ」

「青空って人の名前？」

## 第二十七話

勇氣に言われて、説明をしていないことに俺も大治郎も気付いた。

「そう。おいらの相棒の名前だよ」

「そうそう。上下真っ黒な服着てる奴でさ」

「青空は、いつも真っ黒な服を着ているわけじゃないよ？　いつも真っ黒な服を着ているのは『じゅう』の奴らだけさ」

俺と勇氣と都雅の目が点になる。

「じゅう…って何？」

「あつ…ええと。うーんと。その説明は今度。それより、さっきの続きだけど。面倒なことっていうのは、その結界のことなんだ。実は、隣の校舎の結界が一度壊されて、再び構築されたみたいなんだ」

「何が面倒なの？」

「その結界に入った猫や鳥なんかが、戻ってこない」

「戻ってこない？」

「そう…因みに、その猫や鳥って言うのは、おいらと同じような仕事をしている奴らだよ。そいつらが戻ってこないっていうんで、青空は心配して…おいらを向かわせてくれないんだ」

どうやら深刻らしい。

大治郎と同じ仕事…ということは、きっと青空たちの代わりに偵察するのだろう。

「どれくらい？」

都雅が大治郎に視線を合わせるために、しゃがんだので俺も同じくしゃがむ。

「鳥が三羽に猫が四匹。全員が戻らないのはおかしいだろう？　それで、青空はお前さん達が通うこの校舎に、気があったかどうか確かめて来てって言うってた。なるべくなら、こっちの校舎にあって欲しいって…ここに無いて事は…つまり」



「…つまりは、その結界が構築された校舎が、怪しいってことか…」  
都雅と勇氣は御互いに顔を見合わせると、苦笑する。

「氣って何？」

「あ…そうか。ええと、何だっけ？」

確か青空に説明を受けたと思うけど。…忘れてしまった。

大治郎がため息をついて、説明する。

「器と…器つてのは肉体の事。器と魂を繋ぐ糸みたいなものだよ」

「ちょ…つとまで、大治郎…」

俺はごくんと唾をのみ込んだ。

「確か、遮断されているだけで、切れているわけじゃ無かったんじやなかったか？ それなのに…この校舎に気がないという事は…」

「切られちゃった…」

「なっ…！」

## 第二十八話

「つてことは無いと思う。だってそうだとしたら、切られた気がお前さんに絡みついてくるはずだからね」

絶句。

の後に、大治郎の首を絞めた。

「がっ…ぐるじい…」

「やめなよ、要……あ、要でいいのかな」

都雅が困ったように笑いながら、そう言った。

俺は手を離して（もちろん本気で絞めてはいないぜ？）大治郎を下ろした。

「一応、要の身体だし。ややこしくなるから、要でいいよ」

「分かった。さて、大治郎は大丈夫？」

「く、苦しかった…ちよつとした冗談じゃないさ…もう。動物愛護団体から、苦情が来ても知らないよ」

大治郎は身体を、一瞬震わせてから都雅を見た。

「分からないことだらけだろうね？ これから青空のところに行くから、一緒に来るといいよ。もっと詳しく教えてもらえると嬉しいからね」

そうして、次に勇気を見つめた。

「さっきから黙っているけど、大丈夫かい？」

「え？ あ、はい」

勇気は大治郎の言葉に素直にコクンと頷く。

ようやく体勢を立て直して、えへへと笑って見せた。

俺は何だかほつとして、ほつとした後に再び気持ちを引き締めた。

「気のこと説明してもらえんדרうな？」

「もちろん」

「で…結局、屋上に呼び出した理由は？ こんな話なら、学園の敷

地外でも良かったんじゃないか」

「こっから隣の校舎が見えるからさ。ほれ、あれを見せたかったんだよ」

そう言つて大治郎は、再び手すりに上ると、視線を隣の高等部校舎に移した。俺たちも立ち上がった手すりに近寄る。

そこに見えるのは、中等部校舎とあまり変わらない校舎。ただ違うのは、屋上で何かがゆらゆらと揺らめいていた。

「何だ、あれ」

「僕…砂時計に見えるんだけど…」

「…オレにもそう見えるよ」

勇気と都雅の言つとおり、よくよく見てみると確かにぼんやりと砂時計のようなものが見えた。

ただ、建物の大きさから考えて、どう考えても俺たちより遥かに大きい、砂時計だ。中身はまだ上のほうにあつて、下に落ちているのは僅かだった。

「大治郎…あれは？」

「悪趣味だよ、あれはね。砂じゃないんだ」

「砂じゃない…となると…中身は何？」

大治郎は空を見上げた後に、ため息をついた。

「あれは…魂なんだ」

「魂…？ 砂に見えるの全部？」

「そう。あれはね、魂を特殊な球に封じ込めたものなんだ。きらきら光ってるだろう？」

大治郎の言つとおり、その砂に見える珠は、色取り取りに光っていて、綺麗だった。

「思いつきり、青空たちを挑発してるよ。阻止できるものなら、してみろつてさ」

「あれが？」

「そう。あの砂が全て落ちるまでに、こっちはお前さんの身体を見つけないといけないってこと。分かったかい？ あの砂時計はあ

る意味、わざと居場所を分からせるために置いたみたいだし」

大治郎は俺たちを振り返って、ため息をついた。

「そろそろ、おいらも疲れてきたから、結界の外でるよ」

猫の姿をしているとはいえ、やっぱり結界は身体に負担を与えるらしい。

## 第二十九話

「あ、それじゃ。僕たちもどうせ外にでるから、僕が君を運んであげようか？」

「あ、ちよつと待て。学食は？」

「学食どころじゃないでしょ」

都雅が苦笑しながら俺の肩を叩いた。

「そつりやそつだけどさ」

「それじゃ、よろしく頼むとしようかな」

大治郎は手すりから勇氣の肩にひょいと飛び乗った。

「で、何処に行けば青空に会えんだ？」

「稲頭司川にかかつている橋の途中」

「……何だ……その中途半端さは」

「稲頭司橋の事？」

勇氣が尋ねると、大治郎は違うという。

「ほれ、もうちつと上流に車は通れない橋があるだろう」

ああ……と都雅と勇氣は頷いたけれど、当然の事ながら俺には分からない。

「ちよつと歩くけど……要くん大丈夫？」

「ああ、平気だ」

都雅が俺の言葉に小さく笑う。

「要の家の車に迎えに来てもらえば？」

「ああ？ 冗談じゃないっつーの……っていかさ……頼みもしないのに来てたらどうしよう」

考えられる。

「来てる可能性のほうが高いよね、何しろ要はまだ退院して間もないんだし」

都雅が校庭を見下ろしながら数台止まっている車を、指差す。

「車……分かる？」

「わかんねえ…」

「兎に角、下りてみようよ。ね？ 要くん。都雅くん」

屋上のドアの鍵を開けて、俺たちは生徒玄関へと階段を下りた。

「そういえば、屋上の鍵を開けたのは大治郎？」

都雅が勇気の横に並んで歩きながら、肩に乗っている大治郎に話しかける。

「ま、一応そうだよっておく。大丈夫、もう今は鍵がかかっているはずだよ」

「ふうん…」

靴を履き替えて玄関をでると、案の定お袋が迎えに来ていた。

「要」

げっ…と言いそうになった口を俺は何とか閉じた。

「帰りましょう、要」

「え、ええと。ううんと…約束…そう！ 友達と約束があるんだ。約束って大事だよな？」

作り笑顔でそういうと、お袋は仕方なさそうにため息をついた。

「稲頭司川で待ってるんだ」

「……分かりました。それじゃ、送るわ」

「二人もいいよね」

勇気と都雅を見ながら言うと、お袋は一瞬都雅を見て眉をひそめたが、頷く。

どうやらお袋自身が運転して来たらしく、俺は助手席で勇気と都雅は後部座席になった。

「猫も乗せるの？」

「大丈夫だよ。おとなしい猫だから」

俺の言葉に大治郎が可愛らしい声で鳴く。これこそ猫撫で声だ。

「暴れたりしないわね？」

「しないしない」

エンジンがかかり、車がスタートすると見慣れない町が通りすぎる。

青空に貰った地図の範囲外の場所へと向かっているから、途中で頭の中の地図も途切れた。

信号に何回か引っかけた後、ようやく川にたどり着く。そこはもうすぐ海に近い場所だった。

橋が架かっている。

その橋の袂から少し離れたところに車を止めた。

### 第三十話

「あれが稲頭司橋<sup>いなずし</sup>。それで、あっちが約束の橋」  
都雅が説明してくれた。

稲頭司橋から数百メートル上流にかかっている細い橋。

「あら、向こうだったの？」

お袋がそう言って再び車をスタートさせる。

そして約束している橋の所で止めてくれた。

「ここは車が通れないから、私はここで待っているわね。早く戻っていらつしゃいよ」

「分かった」

三人と一匹で車をおりて、橋を渡る。

丁度中央の場所に、青空が立っているのが見えた。

「お久しぶりですね」

青空の元にたどり着いた俺に、にっこりと微笑んだ青空は俺の後ろに付いて来ていた二人を見て深々と頭を下げた。

「始めまして、青空と申します」

「あ、こちらこそ始めまして。僕、鳶沢 勇氣です」

「八潮路 都雅」

二人の名前を聞いて、青空は嬉しそうに頷いた。

今日の青空は黒い服ではなくて、紺色の制服らしきものを着ていた。あいにく何処の制服かはわからないけど。

「これからは定期的に連絡できるようにします。あの砂時計があるという事は、コレクターが関わっているようですから」

「コレクター？」

俺たち三人が声を合わせて言うと、青空は頷いて見せた。

「僕たちが勝手にそう呼んでいるだけですけど。コレクターと呼ばれる人々です。集団ではなく、大抵は一人で行動していることが多いんですよ。でも、今回は複数のコレクターが絡んでいるようです。」



あの魂玉の数は僕が見た中でも類を見ない数です。それで砂時計を作るなんて…」

「こんぎよく？」

「たましいの、たま…と書いてこんぎよく…といえます。魂が封じられた玉のことです」

青空がため息混じりに言った途端に、橋の欄干にカツンと何か硬いものが触れた音がして、俺たちは音のした方に視線をやった。

青空の斜め後ろの欄干の上に人が立っていた。

いつの間に来たのか、橋を渡る音はしなかったのに。

「我らはあの砂時計を玉響たまゆらと呼ぶ。近くにみると、それは素晴らしい音を奏でるのでな」

欄干の上に立っているその人物は、牧師のような服を着ている。正面から見ているのでよくわからないけど、どうやら髪が長いらしい。その髪は金色に光っていた。

俺たちが言葉も出ずに青空に視線を戻すと、青空は辺りを見回している。

「ラゴ様。早く欄干から降りて下さい」

青空の声が以外に厳しく聞こえて、俺は少し驚いたけど…そのラゴ様と呼ばれた男の方を見ると特に怒った様子も見せずに、欄干を降りて青空の隣に立った。背が高い。都雅と同じくらいかも。

「あれほど上から下りてくるのはよして下さいとお願いしましたのに」

青空は深いため息をつく。

「良いじゃないか。誰にも見られてはいないよ。それに、見られたところで、その人間は目の錯覚だと思うさ」

小さく笑った後、ラゴと呼ばれた男は俺に手を差し出した。

「そなたが噂の少年か？」

「……三刀屋鋼樹です。…今は船迫要の身体を借りてますけど…」  
雰囲気圧倒されて、おもわず敬語をつかってしまう。握手を交わした。

「コレクターの血が騒ぐね。他のコレクターも喉から手がでるほど欲しがっているだろう」

ラゴが言った言葉に青空はさっと表情を硬くした。

「ラゴ様：それでは何か分かったのですか？」

「そうだね…。かなり大変ことになってきた様だよ」

### 第三十一話

隣の勇気と都雅を見ると、置いてきぼりにされたような顔をしている。そして俺の方を見ると苦笑いしてみせた。俺も苦笑して返していると、青空が「何てことだ」と小さく呟く。

「青空…えっと…悪いんだけど…説明してくれない？」

「ああ…そうでした。申し訳ありません。こちらはラゴ様。僕の…何と言えいいでしょう…その…養父…でしょうか」

「養父？」

「私は父親になったつもりはないんだけどね…せめて師匠にして欲しいのだが」

ラゴは微笑みながら青空にそう言った。

「申し訳ありません…ええと、それで僕が今の職業につくまで面倒を見てくださった方です」

「ちょっと待て。そもそも青空たちの職業って何だよ」

俺たちの足元で、のんびり毛づくろいをしていた大治郎が驚いたように跳ね上がって、俺を見上げる。

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「聞いていない」

「おやおや…どうやら最初から説明しなくてはならないようだね。青空」

「はい…申し訳ありませんでした。話す機会がなくて…まず、僕は現在探索部に所属しています」

「探索部？」

「はい。お気づきの事と思いますが、僕らは黄泉の国つまり死んだ魂が集う国で働いています。色々な仕事があるのですが、いわゆる死神とあなた方が呼んでいる仕事もその一部です。大まかなものを言いますと、僕が所属する探索部、それから”らいごうぶ”<sup>たままゆ</sup>。あとは”ほうりべ”ですね。この三つと…それらを統括する玉繭。それ

からこの部に所属していないコレクター、それから”じゅう”の二つ」

都雅の隣で、勇気が黄泉の国？と小さな声で驚いている。

「探索は分かるとして…『らいごうぶ』とか『ほうりべ』って何だよ」

「来る…の来に迎えるで来迎です。あなた方が死神と呼んでいる仕事です。つまり死者を迎えに行くんですよ。ほうりべは祝う部です。大抵の場合はほうりと呼びますが。この仕事は魂を清めて生まれ変わる手伝いをする部署です」

「あの…、統括する部が何で『玉繭』って言うんですか？」

勇気が恐る恐ると言った感じで尋ねると、青空が困ったような顔をした。

「それを説明すると、長い歴史の話になってしまうので、もう少し時間ができたらお話しすると約束します」

ラゴ様がうんうんと頷いた。

青空の隣でラゴ様が動くとき金の髪がキラキラ光って、集中力のない俺はついそっちを見てしまう。俺と目があつたラゴ様はにっこりと微笑んで見せた。

「青空」

「はい？ 何でしょうか、ラゴ様」

「どうやらここではゆっくり話ができないようだ」

ラゴ様は俺を見ながら言ったので、俺は何だか慌てて（ラゴ様みたいなのは苦手なんだよな）首を横に振る。

「あ、いや。えっと」

「そう言えば、要くんのお母さんも待っているし、あんまり長く話さない方がいいかもしれないよ？」

勇気が車の方を見ながらそう言った。

## 第三十二話

「そうだったっけ…」

全員が車の方を見ていると、都雅が小さく唸る。

「どうしたの？ 都雅くん」

「……………いや、オレの家で良ければ、場所を提供するけど」

「え？」

「ここから近いのはオレの家だろうから」

青空と俺は顔を見合わせて、頷いた。

「それじゃあ、お願いしてもよろしいですか？」

「いいよ」

「それでは、先に八潮路さんの家に向かってください。僕らもすぐに行きますので」

「分かった」

小走りで車に戻ると、お袋がほっとしたように微笑んだ。心配していたようだった。

「ごめん、これから都雅の家に遊びに行く事になったんだけど…」

後部座席のドアを開けて、都雅たちの鞆を取って渡しながら言う  
と、お袋の顔色が変わる。

「ええ？」

「すぐ近くだから歩いていくよ。それじゃ」

ドアを閉めて行こうとすると引き止められた。

「待ちなさい、要」

「何？」

「乗りなさい」

険しい顔でお袋がパワーウィンドを開けて顔を出す。

「友達の家に遊びに行くくらい良いだろう？」

「ダメだと言っているんじゃないやありません。乗りなさいと言ってるの。  
あなたは退院したばかりなのよ？ お願いだから、心配させないで

頂戴。お友達の家まで送るから」

俺はちよつと驚いて目を瞬かせた。もつとヒステリックに反対すると思つていたからだ。

「……分かった」

勇気と都雅と顔を見合わせて頷くと、車に乗り込む。

「送る前にお友達を紹介してもらえるかしら？」

「あ、ええと……」

勇気が俺の目を見て小さく頷いた。

そういえば、お袋は勇気のこととは知っているんだっけな。

「えつと、鳶沢のことは知ってるよね。鳶沢 勇気くん。それでこっちは八潮路 都雅くん。同じクラスだよ」

都雅はバックミラーに映ったお袋に軽く会釈して見せた。

「それで、どちらのお宅に伺うのかしら？」

「都雅：くんの家に」

「そう…それじゃ、道案内をよろしくね」

都雅はコクンと頷く。

「まず左折を」

「左折ね」

ウィンカーを上げて左折する。

次の信号を右に曲がって少し狭い道路を入った後、まっすぐ行くと広い道路に繋がっていて、その道を右折。Ｔ字路の角に都雅の家があった。

### 第三十三話

「……なんだか…馬鹿でかいな」

「住居として使っているのは半分くらいだよ」

都雅の家は二階建ての一軒家の隣にもう一個平屋の家がくっ付いているような形をしていた。

表札には“八潮路 右文”と書かれてある。

「八潮路…う…ぶん？」

俺の呟きに都雅が小さく笑った。

「なんだよ…」

「ごめん。それは“うもん”と読むんだ」

「うもん？」

「そう。ゆうぶんという古語からきているんだってさ」

「ふうん…」

などとやりとりしていると、お袋が小さくため息をついた。

「あの、右文…なのね？」

「というので、俺は首を傾げる。」

「あの？ と言うと？」

「えー？ 要くん、もしかして八潮路 右文知らないの？」

「何だよ…勇気は知ってるのか？」

「もちろんだよ」

誇らしげに胸を張る勇気に何となく腹を立てて、俺は勇気の鼻を軽くつまんだ。

「じゃあ、教えろよ」

「て、はなひてよー」

都雅が勇気の答えを待たずにドアを開けて車を降りた。

「家に入れば分かるよ」

「お、おう」

俺は勇気の鼻を掴んでいた手を離した。

「もう…要くんは乱暴なんだから…」

「何だと？」

「わー。ごめんなさいごめんなさい…」

勇気が慌てて車を降りる。俺も急いで降りて勇気を捕まえると、わき腹をくすぐった。

「わー、くすぐりたいよ！ やめてってばー！」

ケラケラと勇気が笑うと、車の中からお袋の小さい笑い声が聞こえた。

「お袋？」

「ごめんなさいね…そんなに楽しそうな要を見たのは久しぶりなものだから…」

そう言ってくすぐす笑う。

「それじゃ、電話して頂戴ね。迎えにくるから」

お袋は軽く手を俺に向かって振ると、車を発進させた。

その車が角を曲がるのを見送って、俺たちは都雅の家に入った。



### 第三十四話

「お邪魔します…」

「…へえ…随分と…絵が多いなこは」

玄関にいきなり龍の絵がお出迎え。さらに廊下に山の絵と鳥の絵、リビングに入ると、どデカイ絵が飾ってあった。見返り美人ってやつか？ 着物を着ている女の絵だ。

「うわー、本物だ！」

勇気が歓声をあげて絵に近付く。

「僕、絵画集でしか見たことないよ」

「…なるほど…と、言う事は都雅の親父さんは画家なわけだ？」  
都雅は頷いた。

「あつちの平屋はアトリエなんだ。だから半分は父のスペースってわけ」

「ふうん…」

「要くん！ この絵はね、右文の奥さんがモデルなんだよ！」

見返り美人を見ながら、勇気は俺に説明する。

「つつーことは、都雅のお袋さんか…へえ。美人だな」

「有難う」

と、いきなり後ろから声がして、俺は振り返った。

「え、あつ」

そこには絵の見返り美人と同じくらい綺麗な女の人が立っていた。洋服だったけど。

「始めまして。都雅の母です。八潮路 まなづる 真鶴、マナちゃんって呼んでね？」

キャピ（後ろにハート）…という効果音がつきそうな感じだった。見た目、いいトコのお嬢様って感じ。都雅の母親にしては若くみえた。

「お母さん…」

「やだー、マナちゃんって呼んでっばー」

都雅は俺と勇気に苦笑して見せた。

「マナちゃん」

「はい、何かしら？ 都雅」

「友達、紹介するよ」

都雅が言った言葉に、都雅のお袋…マナちゃんはひどく驚いた様子だった。

### 第三十五話

「まあ…友達？ 都雅が友達を連れてくるのは初めてじゃない？  
今晚は御赤飯炊いちゃおうかしら」

「…まず、どうやら右文のファンらしい、鳶沢 勇氣。それで、こ  
っちが船迫 要」

勇氣は絵とマナちゃんを見比べて、ほうとため息をついた。

「お会いできて光栄です」

「まあ、うれしい」

勇氣は右手を制服の裾で拭いてから、マナちゃんと握手を交わす。

「物凄くファンなんだな」

「うん。僕、画集を全部持つてるよ。展覧会が開かれる場所が遠く  
で、今の僕じゃ行けないけど。大人になったら、絶対に行くつもり  
なんだ。お金をためて、いつか八潮路 右文の絵を買うのが夢なん  
だよ」

勇氣は気づかなかった様だけど、後ろで小さくため息が聞こえて、  
俺は気がついて振り返る。

そこには作務衣に身を包んだ初老の男が立っていた。

「あ、お父さん」

都雅が気づくと、作務衣の男は近付いてきた。

「要、勇氣。父の右文」

「……八潮路 右文だ」

てつきり祖父かと思った…と言う言葉は呑み込んで（勇氣は知っ  
ていたみたいだった）、俺は会釈する。

「めずらしいな、お前が友達を連れてくるとは…天変地異の前触れ  
か？」

「あら、いやだ…右文さんったら。面白い冗談」

「お父さんが冗談を言う方が珍しくない？ そっちの方が天変地異  
の前触れかも」

「わしは本気で言ったのだがな」

「あらそうなの？ それじゃ、災害対策しておこうかしら」

「今までしてなかったの？ お母さん」

「都雅ったら、マナちゃんって呼んでって言ってるでしょう。ねえ、右文さん。今日は御赤飯炊こうと思うの。素敵でしょう？」

「……お前に赤飯が炊けるのか」

「あら、最近の炊飯器を甘くみちやいけないのよ」

「赤飯は作らなくてもいいって。それより、お昼ご飯を用意しても  
られない？ マナちゃん」

八潮路一家の会話に入り込めず、俺と勇氣はポカンと立っていた。

「何だ、まだ昼飯も作っていないのか。正午は過ぎたぞ」

「あら、いつけない！ すぐ作るわね」

「オレ達は二階にいるからね。できたら呼んで」

「分かったわ」

まだポカンとしながら、俺と勇氣は都雅について階段を上る。

階段を上って左右に一部屋づつ。突き当たりにもう一部屋。その  
突き当りの部屋が都雅の部屋らしかった。

## 第三十六話

「入って」

「ああ」

十二畳くらいの部屋だった。

その中に大き目のベッド（後で聞いたら特注品だそうだ。背が高いので、既製品だと足がでるんだと言ってた）と、勉強机。その勉強机は俺の記憶の中にある机と違って、茶色じゃなかった。隣にあるラックと同じ材質で出来ているらしい。上の部分は淡いブルーで、支柱は薄いグレー。部屋全体がブルーを基調としているようだ。本棚までブルーだ。

「好きなところに座って」

都雅はそう言ってクッションを俺たちに渡す。

「サンキュー。それにしても、お前の両親って変わってるな。親父さん、いつもあんな感じ？」

都雅は首を横に振って笑う。

「あれは営業用だね」

「営業用…？」

「そう。勇気がファンだって言うのを聞いていたんじゃないかな？ 画家としての外観を作ってるんだって。今、下に行ったら面白いと思うよ」

俺と勇気は顔を見合わせた。

「面白い…とは？」

「見に行く？」

「行ってもいいのか？」

「勇気は？ 行きたい？」

「ちよつと…見てみたい」

都雅は苦笑して、頷いた。

「静かに下りてね」

俺たちは都雅の部屋を出て階段を静かに息を殺しながら、ゆっくりと下りた。

下から微かに声が聞こえてくる。

都雅の親父さんとマナちゃんの笑い声だった。

「右文さん、はい、御味見」

「ん…うん。美味しい」

「本当？ うれしい」

「これは洗っちゃってもいいのか？」

「うん、いいよ」

そつと影から覗くと、右文さんはマナちゃんとお揃いのフリルが沢山付いた白いエプロンをしていた。

満面の笑みでボールや菜箸を洗っている。

そして、視線に気づいたのか俺たちを見つけて慌ててしまい、お皿を一枚割ってしまった。

「とつ、都雅っ」

「ごめんごめん」

「右文さん、怪我しちゃうわ。ほら、もう良いから。ご飯をよそってくださいな？」

「う、うむ」

「僕も手伝います」

勇気が目をキラキラさせて駆け寄って行った。

### 第三十七話

カレーの香りが鼻腔をくすぐって、お腹がぐぐーっとなる。そつえばお腹が減ってきた。

「右文さんと一緒にご飯の用意ができるなんて、夢みたいだ」  
頬を紅潮させて、勇氣は右文さんがご飯をよそったお皿にカレーをかけていく。

「何て幸せな昼食なんだろう！」

勇氣はそう言いながら俺に皿を手渡し、俺はそれをテーブルに並べた。

都雅はスプーンやコップを並べている。

準備が整ってようやく昼食を取ったのが十二時四十五分。

そのカレーは豚肉、じゃがいも、にんじん、たまねぎというカレーで、野菜が大きく切られていて、食べ応えがあった。

俺たちが談笑しながら食べている中、勇氣だけスプーンを持ったまま微動だにしない。

「勇氣？ どうした」

「僕：胸いっぱいで…食べられないよ」

本当に勇氣って面白い奴だよな。感情の表し方が大げさというか、何と言うか。兎に角見てて面白い奴だ。

「でも折角一緒に用意した昼食、食べないと後で後悔しない？」

都雅に言われて勇氣は二回頷いて食べ始めた。

一口一口、かみ締めるようにゆっくりと食べる。

何だか涙を流しそうな雰囲気。

勇氣の前で画家の仮面を被らなくてもいいと都雅に言われた右文さんは、すっかり好々爺と化している。

「僕、画集持ってくれば良かったなあ…今度、画集にサインしていただませんか？」

勇氣が食べ終えてそう言うと、右文さんは首を傾げた。

「都雅、私の部屋から【あれ】を持ってきなさい」

「うん、わかった」

しばらくして都雅が二冊の本を持ってきた。

「新しい画集だ。これにサインして君たちにプレゼントしよう」

「ええーっ！」

勇気は目を見開いた後、潤ませて身体を震わせた。

「はあ……」

俺は興味ないことなのでテンションは高くない。

目の前でサインをして貰って、さらに【鳶沢 勇気くんへ】と入れてもらい、感激している。

「こっ……これ発売前の画集じゃないですか！ うわー……ば、僕……倒れそう……」

「そんなにわしの絵を好いてくれてるのか……有難う。さて、こっちは君に」

右文さんはもう一冊を俺に手渡そうとした。

「俺が受け取ってもいいんですか？ 俺、右文さんのこと全然知らなかったんですど」

「そんなこと気にするものではない。わしを知らない人は五万という。知っている者でも、わしの絵を好きな者も嫌いな者もいるであろう。だから、君にも好き嫌いを強制するつもりは無い。が、ぜひ、見て欲しい。都雅の友達だ。都雅がこういう絵を見ながら育ったという事の一片を……知って欲しいのだよ」

俺は深く頷いて、受け取った。

「有難う御座います」

右文さんは微笑んだ。それはきつと、家族の前でしか見れない笑顔だったんだと思う。



### 第三十八話

とても和やかな昼食だったけど、俺は窓の外にキラキラ光るものを見つけて、はっと気づいた。

「都雅」

俺の方を振り向いた都雅は、気づいたのか頷いて立ち上がった。

「さ、片付けちゃおうか」

「あら、後片付けなら右文さんと二人でやるから良いわよ。今日はお友達も来ているんだし、特別に免除しちゃう」

「そう？ 有難う。それじゃ、行こうか」

「うん」

ぼやーっとしている勇気を引つ張って二階に上がる。

駆け上がって都雅の部屋に入ると、鍵をかける。つつーか鍵つき

…羨ましい。

部屋には青空と大治郎がすでに待っていた。大治郎はベッドの上に、青空は立っている。

「悪い！ 待たせたかな」

「大丈夫ですよ」

「かなり待ったんだけどねえ」

青空がにつこりと微笑んで言った後、大治郎がわざとらしい溜息をつきながら首を振る。猫の溜息…ちょっと面白い。

「こら！ 大治郎」

大治郎はそ知らぬふりで、歩き出すと窓から顔をだしてニヤーと鳴いた。

その声が合図なのかラゴ様が窓の外から入ってくる。

「窓の外がキラキラしてたから、気づいたんだけどさ…」

俺がそう言っていると、ラゴ様はにつこりと微笑んで長い髪を指でつまむ。

「ふうむ。私の髪も役にたつのだな」

「ところで、時間もあまりない事だから、さつさと説明始めてくれよ」

「はい、分かりました。ええと、それでは…何から説明しましょうか」

青空が頷いて俺たちの顔を見回す。

「俺が一番聞きたいのは、俺の身体が盗まれた理由」

「それは、こちらでも分からないとお答えしておきます。ただ、いくつか推測できることはあります。第一に生贄いけにえの場合。第二に新しい器うつわ。第三に依り代よりしろの三つです」

青空が指を一本一本増やしながら説明する。

「生贄は何となく分かるけど…新しい器と、それから依り代って何だよ」

「新しい器とは、三刀屋鋼樹みつや こうじさんの身体に違う魂を入れる…と言う事です」

「今の俺みたいにつてこと？」

「はい」

俺の身体に俺じゃない違う魂が入ると思うと少し…いや、かなり変な気分だった。

要もこんな感じだったんだろうか。

「それじゃ、依り代は？」

青空が説明する前に都雅が本棚から辞書を引っ張り出してきて、開く。

「“依り代” 神霊が現われる時の媒体となるもの…だそうだよ。つまりは神様を君の身体の中に下ろすってことだね」

「はあ…？」

理解しにくい。俺に神霊を下ろしてどうするんだよ。

「ラゴ様から先ほど教えて頂いたお話だと、どうやらコレクターと人間が結託しているようなんです」

「それが何か？」

「コレクターは器など求めん。魂…それも美しい音を奏でる魂を手

に入れたがるのだ」

### 第三十九話

ラゴ様がうれしそうに説明を始めた。

「大抵コレクターは彷徨っている魂を捕まえて気に入ったものを集める。だが、今回は何を考えたのか、人間と協力することを思いついたらしい」

「個人主義のコレクターでは珍しい事です」

青空が難しそうな顔をしつつ、そう言った。

「そういえば、さつきも複数のコレクターが関わっているって言うてたっけ？ でも複数のコレクターで俺一人の魂？ 魂って分割できるのか？」

「魂自体は分割できません。しかし、記憶は分けることができるんです」

「記憶…？」

「はい。魂には記憶という霧のようなものが詰まっています。それを魂玉こんぎょくよりもさらに小さい玉に封じ込めます。それをコレクションにするコレクターも多いのです」

「楽しい記憶だけを集めるものが多いが、逆に苦しい記憶や哀しい記憶を集めているコレクターもいる。私には理解できないがな…」

ラゴ様は美しい（俺がいうのもただけどさ）眉を寄せて、首を横に何度か軽く振った。

「魂玉はきれいな音を奏でるって言うてたけれど…記憶の玉はどうなるのかな？」

都雅が聞くと、ラゴ様がにっこり微笑む。説明するのが楽しいようだ。

「そうだな…。そなた達の世界でいうと、魂玉がオーケストラであり記憶が楽器といったところだろう。記憶だけでも音は奏でる。だが、魂玉というオーケストラに勝る音はない。特に玉響たまゆらは素晴らしいのだ」

ラゴ様の隣で青空が少し呆れた顔をした。

「ラゴ様…本当はあちらのコレクターに加わって、砂時計の玉響を聞きたいと思っていらっしゃるのではないでしょうね」

「む…いや。そうではないのだが」

「そういえば、ラゴ様もコレクターだって言ってますでした？」

「勇気が思い出したように言うと、青空が頷いた。

「それなのに…何で青空さんと一緒にいるんですか？ 個人主義じゃないんですか？」

「私は特別なのだよ」

「ものは言いよう…ですね。ラゴ様は面白いと思ったことにしか関わらないのです。普段はお願いしても手伝ってくださらない」

「俺の身体が盗まれた事が、面白い事？」

俺がラゴ様を睨みつけると、意に介さないといった様子で笑う。

「そなたが面白いのでな」

## 第四十話

「俺が…面白い？」

「そう。そなたは五百年に一度、現れる…という珍しい魂なのだ」  
俺と都雅、勇気はそれぞれ顔を見合わせる。

「珍しい魂？」

「そなたの魂は魂玉に入ると、歌を歌うのだ。他の魂玉は音を奏でるが、歌いはしない」

「何だ…それ」

「僕たちも最近まで詳しいことが分からなかったのですが、ラゴ様が協力してくださる事になって分かった事なんです」

「われわれコレクターにしか分からない気配だから、大抵はコレクター同士で争いで終わる。が、今度はそうは行かなかったようだ。そなたの身体と魂の交換が条件だろう。だが、魂が逃げた」

俺は、自分が空中にフワフワと浮いていた時のことを思い出した。  
「危険を察知したのではないだろうか？ それで身体から無理やり離された魂は、魂玉に入れられる前に逃げた…」

青空がそう言いながらも首をかしげる。

「でも…どうやって逃げたのでしょうか…」

ラゴ様を見上げた青空は、笑っているラゴ様を見て目を瞬かせた。  
「もしかして…ご存知なのですか？」

ラゴ様は笑いながら頷く。

「何しろ、最初に見つけたのは私だったのだからね」

「……え？」

全員がラゴ様を見つめる中、都雅が、

「と、言う事は少なくとも五百年は生きている…という事か」と呟いた。

「まあ…私のことは置いておいて」

「五百年に一度…という事を分かっているということは、ラゴ様が

見つけれられる前にもあったと言う事ではないのですか？」

「うむ。確かにめずらしい魂がいる……というのは書物にも残っている。だが、コレクターが見つける前に来迎部が向かえ、祝部によって新しく生まれ変わってしまっていた。私が見つけるまでは誰も魂玉に入れた事はなかったのだ」

青空が慌てた様に、どこに隠していたのかノートパソコンを取り出して開いた。しばらくカチャカチャとキーを打っていたが、目的の物が見つかったのか手が止まった。

「ああ。これですね。……確かに五百年ごとに現れている……虹色の魂？」

「虹色が珍しいってことは、普通はそんな色じゃないのか？」

「ええ。それぞれ色は違いますけど……虹色というのは無いですね。僕も見ただこと無いです……あれ？……でも彼を助けた時は虹色じゃありませんでしたよ……ラゴ様」

ベッドの上で丸くなっていた大治郎も顔を上げて頷いた。

「おいらも見ただけど、虹色じゃなかったなあ……」

「そこがこの魂……私は“こよなし”と呼んでいるが……の不思議なところだ。気配を消すのだよ……それと共に色が無くなる。彼を見つけた時、オーラが無かったであろう？ 普通の魂ならば光っているはずなのに」

青空と大治郎は顔を見合わせた。

「黒いオーラだったわけではないのですね？」

「深夜だったために気づかなかったのであろう。虹色ならば、他のコレクターに見つかっていてもおかしくは無いのだから。青空が見つけたのは何故だ？」

「他の魂を探索した帰りでした。偶然、空中に浮遊している魂を大治郎が発見しまして……玉繭（たままゆ 黄泉の国をまとめている組織名）と連絡を取ると、まだ器が生きているとの報告と器が行方不明との報告を受け取りました。それで最初は気を探したのですが、どうしても途中でわからなくなってしまったんです」

「つまり、大治郎や青空が発見しなければ、他のコレクターに拾われていた可能性があると言っことだ」

話の展開が早すぎて理解できない。

青空は難しそうな顔をして、うつむいた。

「それで、どうやって逃げ出すのか…教えていただけますか」

ラゴ様一瞬どうしようかと天井を見上げたが、すぐに青空に視線を戻す。青空も顔を上げてラゴ様を見つめた。



## 第四十一話

ラゴ様は短い溜息をつく、話し始めた。

「気配を消すと言っただろう？ 気配を消してしまう前、一瞬だけ眩い光を放つ。いわゆる目くらましというものだろうね。私が魂玉に入れられたのは、あの時兄妹に話しかけられて違う方向を見ていたためだった。そうでなければ二人とも目がくらんで逃がしていただろうね」

今回はそれで逃げられたということなんだろうか。

「しかし…今回で他のコレクターにも知れ渡る。次は無いだろう」  
ラゴ様は本当に残念そうにため息をついた。

しばらくの沈黙のあと、青空が目頭を押さえながら口を開いた。

「いくら玉繭に属さないコレクターでも、人間とコンタクトを取ることはしてはならないと分かっているはずなのに…」

「え…僕たちは…いいんですか？」

「三刀屋さん達の場合は特別なんです。我々は普通、姿を隠していなければならぬんですよ」

確かにコンタクトを取りすぎて、この世とあの世がくつつくと面倒な事になりそうだ。

青空は小さくため息をついて顔を上げた。

「コレクターは魂を無理やり取り出す事ができないので、人間に魂を取り出してもらう代わりに、その器は人間に渡す…」と協定を結んだのですね…きっと」

そいつらにとって、俺の魂も身体も物同然ということか。

「ずいぶんな扱いだな」

俺の目が怒りに燃えているのを見て、ラゴ様は小さく笑った。

「尊厳を主張するかね？ だが、そのためには身体を見つけないてはならない」

「このままでは、気の糸が切られてしまうのではないかと、心配で

す」

青空の吐息が震える。

「まあ…それは大丈夫だから安心しなさい。青空」

ラゴ様は何でもない…といった風にヒラヒラと手を振った。

「どうして大丈夫だって、分かるんですか？」

都雅がこれまた深刻そうな雰囲気もなく、茶のみ話のように気楽に尋ねる。

「ふむ。そなたも変わった魂だの。どうだ？ 死した後は私のものにならないかね？」

「ラゴ様…！」

青空は勢いよく立ち上がった。

「分かっておる、青空。だが、急いては事を仕損じると言うではないか。落ち着きなさい」

右手で顔を覆って、青空は落ちるように座る。

ちよっとだけ青空に同情するよ。俺的にはラゴ様って上司に持ちたくないタイプだ。

「あの砂時計の魂玉が全て落ちてしまふまでは切れないだろうから大丈夫だ。そういうところだけはきっちり守るのがコレクターだからね」

根本的なルールを守れよ…と言いたい。

「生贄の場合はどうですか？ 肉体が死んでしまったら切れてしまうのでは？」

都雅が小首を傾げて言った。

「生贄にしる何にしる、あの砂時計の時間は守られる。だが、生贄が一番厄介だろうね。新器と依り代ならば、魂は違うが身体は一応生きている。生贄はそうはいかない……が。私は生贄ではないと推測する」

全員がラゴ様に注目する。

「どういうことですか？」

「何に捧げるか…によるが、少なくとも私の知っている生贄の儀式

というのは器と魂両方を捧げるものだからだ。今回の場合、魂は離脱させられている。もちろんこの考えは推測であって百パーセントではない。それゆえ…言うのをためらっていたのだが…」

ふと横を見ると、勇氣が一生懸命理解しようとしている様に見えた。

「勇氣。オーバーヒートしないように気をつけろよ」

「え？ あ、うん。えっと…質問…いいですか？」

ラゴ様と青空の顔を交互に見ながら勇氣がそう言うと、二人は頷いた。

「依り代にするなら、盗むまでしなくても良いような気がするんです。もちろん、何らかの危険があるのかもしれないですけど…でも、変な言い方すると、誤魔化して説得すれば、盗まなくても済むでしょう？」

「一理ある…と言いたいところだが、それならば三つとも誤魔化して説得できる。そもそも忘れていないかね？ 本来ならば、すでに魂玉に入っているはずなのだ。そうすれば、器は空になる。それを持っていた…と言う事だ」

「ああ…そうか…」

勇氣はため息まじりに言って、目を閉じた。

「身体を見つける事も重要だが、見つけた時にどうやって奪還するか…という課題も残っている。あちらも、それを阻止しようとするだろうからね」

「コレクターが複数いることを考えると…」

青空は深くため息をついた。

ラゴ様みたいな奴が複数いると思うと…俺もため息が出る。

「そなたがああ校舎へ通うようになるまでに、何か策を考えなくては」

ラゴ様が楽しそうに言う。

効果音を付けると…そう「ウキウキ」といった感じだ（効果音じゃないか…？）。

「それまでに、何か俺がやっておく事ってないのか？」

「特にありません。新学期になるまでは、あの校舎に近付かないで下さいね」

「ダメなの？」

勇気がそう聞くと、青空は小さく微笑んだ。

「八潮路さんと蔦沢さんは結構です。そうですね…春休みの間に観察に行つていただけますか？」

「いいよ」

「僕、がんばります」

二人は頷く。

「ちよつ。えつ。俺は？」

ラゴ様がフッフと笑って俺の両肩に手を乗せた。何か意味ありげ。何か重要な事でも？

## 第四十二話

「自宅待機しかない」

がつくり…

俺は立ち上がると「ぐあーっ」と叫びながら、都雅のベッドにダイブした。

大治郎がつぶされないようにとピョンと飛んだ。  
身体が何度か跳ねた後、俺は身体から力を抜く。

「俺にすることは無いのかよ」

「そうだ。校舎は勇気に行ってもらおう。先輩から変わった事なんかを教えてもらえるだろう？」

都雅がそう言ったので、俺は身体を起こした。

「んで、その間。俺達は何してるんだよ？」

都雅はにこつと笑う。

「勉強」

「……は？」

「べ・ん・きょ・う」

「いや…スタツカートつけて言わなくても分かるけど…えっ…。学校の？」

「違う違う。コレクターや魂の事について…だよ。勇気には後で説明する事にして、分担した方が良くと思う。本当はオレも別な事をした方が良くは思うけど、要をほつとくと何をするか分からないし」

まあ…短時間で俺のことをよくわかっていらっしやる。

「二人で憶えたほうが、勇気に補足しやすいだろ？」

「確かに」

俺が頷くと、都雅は勇気の方を振り向く。

「一人で校舎に行く事になるけど。構わない？」

「……う、うん。大丈夫だよ」

右手の拳をギュツと握って、勇氣は二度頷いた。

「そうしてもらえると助かるなあ。おいらと同じような仕事をしている仲間が、帰って来ないんじゃないって青空が言うからさ」

「ぼ、僕が入っても大丈夫だよな」

「おっ、心配かい？ やっぱりここはおいらの出番かな」

ベッドを俺に占領されて、床に降りていた大治郎がそう言つと、青空が大治郎の首の後ろ辺りを持ち上げる。

「大治郎。だめだつて言つたらう？」

「えー。おいらは行つてみたいんだけど…なあ」

上目遣いで青空に言つた大治郎は、厳しい顔の青空を見て視線を逸らした。

「青空は怒ると怖いから…やめる」

俺は思わず吹き出してしまい、それにつられたかの様に都雅や勇氣も笑つた。

「大治郎はすぐに危険な場所に行きたがるんだから」

「義侠心だよ義侠心」

「違つてしよう。そういうのを無謀つて言つんだよ」

青空は大治郎の顔を自分の方に向けると、怖い顔をして見せた。

「……分かつてるよ…分かつてるつてば。ちよつと…言つてみただけじゃないかあ」

「青空。もうそれくらいで許してあげなさい」

そう言つてラゴ様は大治郎を抱き上げた。

仕方なさそうに手を離れた青空は、ため息をつく。

「へへへ…ありがとうございます、ラゴ様」

「大治郎も少しは自重しなさい」

ラゴ様の膝の上でしゅーんとうつむいた大治郎は、猫らしくニヤーンと鳴いた。

「他に質問はありますか？」

青空が俺たちの顔をそれぞれ見ながら言つと、勇氣が学校でもな

いの小さく手を上げた。

「あの、『気』のこと教えてもらえませんか」

「そうだった。俺もそれ聞きたい」

「分かりました」

『気』が身体と魂をつなぐ系のようなものだと言う事は憶えている。でも、見えなくなっただのに俺が死んでいない理由が分からない。「我々が器と呼ぶ人間の肉体と魂とを繋ぐ細い金色の系のことです。その系が切れた時、初めて死んだということになります。この系は細いとはいえ簡単に切れるものではありません。ただし、寿命が来た時と器が機能を停止した場合は自然に切れます。切れると言うか、離れるのです。器と系がまるで同じ磁極になっただかのように弾かれて離れます」

「寿命がきていない時の系はハサミを使えば切れる…などという代物ではないのだよ」

ラゴ様は左手の人差し指と中指をハサミに見立てて、動かして見せた。

「切られていないのに、見えなくなると…多分、解されてしまったのだと思います。」

「ほぐされた？」

## 第四十三話

「この糸は沢山の集合が縊<sup>よ</sup>られたものなので、その全てが切られない限り、糸が切られたことにはならないのです。一本だけでも繋がっていれば、生きている。切れた場合は魂に巻きついて次第に色をなくしていきます。三刀屋さんを見る限り、糸は巻きついていないので、まだ繋がっています。その繋がっている糸を伝って見つづられた者が、解<sup>ほ</sup>してばらばらにしたのでしょうか」

「解<sup>ほ</sup>されて見えないのに、巻きついていないの分かるの？」  
都雅がささず言つと、青空は都雅に向かって頷いた。

「糸は自分で縊る性質を持っています。解されても自分でもとに戻るはずなのですが、今回の場合は多分何かで一本一本を抑えているのでしょうか」

「そこに、コレクターが関わってくるのだろうね。沢山のコレクターがその一本一本を掴まえているのではないかな？」

ラゴ様が自分の金色の髪を、まるで気の糸のように指でつまみ上げる。

「そうすると、細すぎて見えなくなります。譬<sup>たと</sup>えると蜘蛛<sup>くも</sup>の糸のような感じでしょうか」

俺たち三人は頷いた。

蜘蛛の糸と言われれば、何となく分かる。

「それじゃ、俺の魂についた気をこう…糸を手繰るようにしていけば、見つかるんじゃないのか？」

俺はラゴ様の髪を引っ張ってそう言った。いや、引っ張ったつもりだったけど、ラゴ様の頭は微動だにしなかった。

「あれ？」

ラゴ様は小さく笑う。

俺の指には何も挟まっていなかった。

「あれ…」



「そこに色々複雑な問題が絡んでくるのだよ」

「複雑な問題って？」

「まず解されてしまうと、殆どの者には見えないし。見えても止まっているわけではないので見失いやすい。さらに本人以外では触れられないものなのだ」

都雅が眉を寄せて首を傾げた。

「矛盾が発生してない？ 本人しか触れられないのに、何故解されたりコレクターが押さえていられたりするの」

「たった一つだけ例外があるのだよ」

ラゴ様は右手の人差し指を俺たちに見せるように突き出した。

「例外？」

「そう。血だ」

「血…？」

「血って…俺の？」

「そうです。三刀屋さん本人の血で掴む事が出来るのです。ですが、我々は器を傷つける事は出来ません」

「ああ…それで人間と協力せざるを得ないってことなんだ…」

都雅が呟くと、青空は目を閉じながら頷いた。

「今回は人間も器を必要としているため、速やかに協定が結ばれたのでしよう」

「待ってください。本人は掴む事が出来るなら、要くんが自分で掴みながら探せるんじゃないですか？」

勇気がパツと明るい顔になって言ったが、ラゴ様も青空も、ついでに大治郎も首を横に振った。

「大事な事を忘れている。残念ながら、彼は糸が見えない」

「見えていないため、触れている事に気づかないのです」

二人の言葉に、俺と勇気はがっくりと肩を落とした。

「それじゃあさ。俺だと思っつけられるかもしれないって言った理由は？」

「第六感…です」

「だいろつかん…？　って何？」

「人間が感じる感覚、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感があります。そのどれでもない。所謂、いわゆる勘というものです」

勘に頼れと？

半分呆れて、俺は口を開けっ放しだった。

「勘をバカにしてはいけない。多くの雑多な情報を排除すれば、自分の器が近くにあるかどうか分かるはずだ」

「雑多な情報…？」

「あゝ」

大治郎がラゴ様の腕の中で、おさえ遮るように言っただので全員が大治郎に注目した。

「どうしたの？　大治郎」

「ひとつ。おもいついだけだ」

「うん」

「その坊や使えないかなあ？」

「坊や？」

大治郎の視線は勇氣の方を向いていた。

「…ぼ、僕？」

「かなり耳が良いんだよね。もしかしたら…、聞こえるかもしれないよ」

ラゴ様と青空は顔を見合わせる。

「本当？」

「だってかなり騒がしかった上に、離れた場所で囁いたおいらの声を、聞き取ったくらいだからさ」

「何だと？」

「それは…可能性があるかもしれませんがね」

「ちよつと、二人と一匹で話を進めないでくれないか」

俺が声をかけると、はつとしたようにこちらを向いた。

「何が聞こえるっていうのか説明してくれ」

「すいません…えっと」

「その説明は私がしよう。前に魂は音を奏でると言ったのを覚えて  
いるかな？」

「ああ、ええ。はい」

「そう。魂は音を奏でる。それはもちろん魂玉に入った時なのだが、  
それに共鳴するように、微弱ながら器も音を出しているのだよ。微  
かに聞こえるのだ。耳鳴りの音に近いがね」

「……は？」

「同じ音は一つとしてないといわれている。つまり、その音を聞き、  
覚えることができれば、見つける確立が高くなるというわけだね」  
頭がグルグルしてきたぞ。

意味がわからねえ。

## 第四十四話

「キーンという音ですか？」

勇気が確信に似た瞳でラゴ様を見つめる。

「そう、それに近い。…聞こえるのだね？」

勇気は頷いた。

「小さい頃から、聞こえてました。病院に行っても原因不明で、直らなかつたんです。ただ、聞こえるのは本当に小さな音で、日常生活にはそんなに支障がなかつたし、時々だったので。そのままにしておきましたけど」

俺は驚いて勇気の顔をしげしげと見つめてしまった。

「それは、魂と器うつわどちらかの音だろうね。御互いに呼び合うように鳴るのだ」

「と、言う事は。この音が聞こえる時って、肉体から離れた魂があるときってことですか」

「そうだね。意外に器から気づかないうちに魂が抜けている人が多いのだ。夢ゆめを見ていると思っおもっているだろうが」

まさに幽体離脱ゆうたいりだつってことか。

「さて、そろそろ私は帰るとしよう。青空はどうするね？」

「ええと…玉繭たままゆに報告する事もあるので、僕も帰ることにします。ほら行くよ大治郎」

「にや？ 連絡の仕方を教えないのかい？」

青空はうつかりしていたらしく「ああ！」と大きな声で言った後、声を出してしまった事に自分で驚いていた。

「すいません。ええと…これ。渡しておきます」

青空が俺にくれた物は、ホイッスルだった。銀メッキのやつ。

俺は思いつきり吹いてみた。

ピーッと音がするかと思いきや、何の音もしない。その代わりに大治郎が飛び上がった。

「そんなに吹かなくても聞こえてらあ！」

「え？」

「それは大治郎を呼ぶ笛なんです。小さく吹いても聞こえますから」「そうなんだ」

「ああ…びっくりした。今度は静かに吹いとくれよ」

大治郎は身体をブルルと震わせる。

「ごめんごめん」

都雅が俺の手からホイッスルを受け取って、じっと眺めた。

「犬笛とは違うんだね」

「そうですね。大治郎だけに聞こえる…と言うと大げさになるかもしれないですけど。他の動物達にも聞こえるのですが、自分と呼んでいる音では無いと分かるんです」

「へえ」

三人でその笛を眺めていると、窓を開ける音がした。

「それでは失礼するよ」

ラゴ様が先に窓から出て行く。

まるで透明な屋根に乗っているかのように、空中に立っていた。

「情報が入り次第、こちらからも連絡しますね。それでは失礼します」

青空は以前、病院で見たように大治郎の尻尾に掴まった。

大治郎がふわりと浮くと同時に、青空の身体も一緒に浮き上がっていく。

窓から二人と一匹が上空に消えてゆくのを見ていた俺たちは、首が痛くなって見上げるのを止めた。

そして窓を閉めた途端に、俺は今頃思い出したのだった。

「あっ！」

「なっ…何？」

「文句言つの忘れてた」

学年のことをきちんと説明してくれなかった事を、言おうとしていたのを忘れていた。

「青空さんだつて、忙しいんだよ。許してあげたら？」

勇気の言葉に俺は深いため息をついて、頷いた。

仕方ない。

今回だけは許そう。

## 第四十五話

「春休みに入ったら、勇気は学校へ潜入だろ。俺は勉強…ううん、つまらない」

「そういう問題じゃないでしょ」

都雅が苦笑して俺にクッションを軽く投げてきた。

「そんなに、つまらないなら楽しいことしようか？」

「楽しいこと！？何だそれ！」

俺がわくわくしてクッションを投げ返すと、すぐに都雅も投げ返してきて、にっこりと悪魔の微笑み。

「学校の勉強」

俺はクッションを抱きしめたままベッドへと倒れこんだ。

「勉強が、楽しいことかよ」

「楽しいでしょ。問題解けると」

なるほど、頭の良いやつはこうしてできるわけだ。

俺がベッドの上で唸っていると、勇気が隣で小さく笑った。

「どうした？」

「だって、要くん。犬みたいに唸るんだもん」

「俺は昔から勉強は嫌いなんだよ」

「昔からっていつから？」

「え…」

俺は思い起こせる昔を、思い出そうと記憶をたどったが出てこなかった。出てこないどころか、ひとつも何も思い出せない。

「……あれ？これって記憶喪失？」

「え？だって以前20代だって言っただけじゃなかった？」

「おうよ」

「20何歳？」

「………」

確か後半だった…はず。と思ったがそれも確かではなかった。名

前とあやふやな年齢しか覚えていないのだ。

「この町に来たことがないのは確かなはずだけど、実際何処に住んでたかは覚えてない……」

俺がそついうと、都雅の目が細められた。

「それは、コレクターに記憶を奪われたのかもしれないね」

「……、記憶をコレクションするって言ってたもんね」

おいおい、それじゃ俺の記憶は戻らないのかよ。

がつくりと肩を落としていると、めずらしく勇気が声を張り上げた。

「でもさ！取り返せばいいんでしょう？ 身体も記憶も取り戻そうよ！ね！」

「……おう！」

俺は起き上がって、勇気の頭に手を載せて髪の毛をグシャグシャとかきまわした。



## 第四十六話

「うわあ、やめてよ！」

「いいじゃん、いいじゃん。はははは、サンキューな勇氣」

「え？ うわああ、やめてよ！要くん！」

向かいにいた都雅が首をかしげているのが目に入って、俺が手を止めると、その隙に勇氣に逃げられる。

「どうした、都雅」

「いや、随分と簡単に言うなと思って」

勇氣の肩がビクツと震えた。一瞬にして顔がこわばる。

「勇氣は俺を元氣付けようとして言ってくれてんだからさ。今のところはいいんじゃない？これから色々問題はでてるだろうけど、俺がこのまま意氣消沈してるよりはマシだが」

そういうと、都雅はにつこりと笑った。

少しドキツとする笑い方だった。

「なるほどね、了解。そういう言い方もあるってことか」

「……もしかして今まで誰かを元氣付けたことない…とか」

「ん〜、どうだろうね」

「……それで、良く彼女できたな」

「懐の広い彼女なんでね」

ふふふと意味ありげに都雅は笑った。

「あ！やつば、年上だろ！」

「残念、はずれ」

「え〜？」

「勇氣は知ってるのか？」

ビクツとなった勇氣だったが、都雅が笑っているのでホツとしたようだった。すぐに頬を緩めて微笑む。

「えっとね、詳しくは知らないんだけど、一緒に歩いているところを見たことあるよ。あれは多分、近くの公立の制服だと思う」

「ほお…ってことは年下？」

俺がにやりと笑って見せると、都雅は苦笑して肩をすくめる。

「極端なものの考え方は、後々困ることになるよ。ちなみに、同級生…ん、学校が違うから同じ年の方が正解かな？」

「へえ…同じ年ね。意外。でもさ、俺のことに巻き込まれたら会えないんじゃないか？」

都雅は少し口の端をあげて笑う。

「まあね。でも、説明するから。友達を救うためだってね」

「へえ。文句いわないのか」

「さっき言っただろう？ 懐の深い女の子なんだよ」

「ほほう、興味がありますな」

俺がそう言っただけで、都雅の顔を見ると一瞬、目が光ったように見えた。

「いずれ会えるよ。でもね船迫 要くん。手を出そうと思わないことだよ」

と、につこり…。

俺と勇気絶句。

こえええ。

今の微笑みは今までの中で一番怖い微笑み。

絶対、何もしませんでしたと心に誓った俺だった（たぶん勇気も、そう思ったに違いない）。

## 第四十七話

「さ、さてと。俺もそろそろ帰るかな。お袋心配するだろうし」

「そうだね。僕も一緒に帰るよ」

勇気が俺の鞆を持って渡してくれる。

ほんと、勇気って気が利くやつ。

部屋を出て階段を下りると、すでに右文さんはおらず、マナちゃんがソファに座って雑誌を読んでいた。

「あら、もうお帰り？」

「はい、お邪魔しました」

勇気がぺこりと頭をさげると、マナちゃんは残念そうに溜息をついた。

「ちつとも邪魔じゃないのよ、もつといってくれてもいいのに」

「はいはい、マナちゃん、わがまま言わないで」

都雅が苦笑しながら母親をなだめる姿は（悪いが）面白い。

玄関に出て靴を履き、勇気と二人で外へとでた。

「また遊びにきてよ。マナちゃんも喜ぶからさ」

「おう、また来るよ」

「絶対絶対来るよ！」

勇気は満面の笑みでそう答えた。

うんうん、愛いいやつ。素直でいいねえ。

などと思っていると、思ったことが顔に出たのか、都雅に笑われてしまった（勇気のことを言ってられないか）

「電話しなくていいの？」

「歩きながらかけるよ。近くに公園あったら、そこに迎えに来てもらうからさ」

「そつ、それじゃ、またね」

玄関の扉の後ろからマナちゃんが寂しそうに顔を覗かせている。  
「また、来ます」

「ええ、絶対来てね！ 待ってるから」

まるで、俺たちが友達のように、そう言っマナちゃんは都雅よりも柔らかい微笑を見せてくれた。

これで都雅の母親だっていうんだから、驚きだ。姉だって言っても通じるだろうに。

オホンと都雅がわざとらしく咳をしたので、俺は慌てて歩き出した。

「そ、それじゃまたな」

「またね」

勇気と一緒に手を振って、都雅の家をあとにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6782c/>

---

冷たい炎と月鏡

2011年4月27日00時25分発行